

---

# ローズウォーター

莎月 双樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ローズウォーター

### 【Nコード】

N09720

### 【作者名】

莎月 双樹

### 【あらすじ】

輸入品フェア最終日に出会ったのは某国の公子サマ。その日から、ちよつと(?)ワケありの公子サマとその周囲の人々に振り回されることに……。

## 01話 フェア会場にて 1（前書き）

初の連載挑戦です。（R15は念のため。）

ファンタジー専門のつもりでしたが、皆様の恋愛小説に感化されてこの作品が生まれました。

作者は妄想系ですので、あまりリアリティを追求しないでいただけるとありがたいです。

完結まで頑張りますが、不定期&ノロノロ更新になると思います。また、きりの良いところで切るつもりですので、一話あたりの長さも不定になる見込みです。

どうぞよろしくお願いします。

## 01話 フェア会場にて 1

場所は某政令市の総合展示場。

時はゴールデンウィークの最終日。

さらに今日は輸入品フェアの最終日。

輸入品フェアというのはその名の通り輸入雑貨や食品などの業者がブース出展して商品を販売する展示会である。

私、佐原清香<sup>さばらひさやか</sup>も出展者の一人。といっても扱っているのは輸入品ではないけれど。

三年くらいまえからフェア会場内に癒しコーナーとして、アロマやマッサージ、占い、美容などを集めたスペースが設けられるようになった。10分千円からのマッサージのコーナーとか特に人気かな。私も最初の時に10分間のタイ式マッサージ試してみました☆

私は昨年からのコーナーに出展している。扱っているのは自家栽培のハーブや自家製のハーブティ。あと、受託で友人の作ったハーブ入り石鹸やオイルなど。

経費等を差し引きするとぎりぎり赤字にならないかというところでも、同じコーナーに出展している人からマル得情報をもらったりとか、趣味が似ている人も多いので友だち作りの場になったりしている。いわゆる「プライスレス」な部分を目的に出展しているわけです。

只今年午後4時20分。最終日の今日は5時までなので、お客さんの姿もあまりない。その少なくなったお客さんも、最後の投げ売りを行っているブースに行っているから、この癒しコーナーにはお客の姿はほとんど無かった。

気の早いところは片づけに入っているようだけど、私のところは休憩タイム。

持ってきた品はほとんど売れて、残っているのはテーブルに並んでいる分だけ。これなら5時になってから箱に詰めても時間はかからない。折りたたみのテーブルやイスは会場の備品で、決まった返却場所に持っていけばいい。ポップとか道具を入れてもたぶん一箱に収まるはずだし、収まらないようだったら受託分以外のもの——私が作った分——はバイトの綾ちゃんやご近所さんにあげちゃってもいい。

どちらかというと、今回のフェアで自分用に買った品の方が多いかもというくらい——だっていろいろ素敵なものがあったんだもの！——で、そちらはとくに荷造り済み。

というわけで、ピッチャーにローズウォーター——薔薇水——を作ってバイトをお願いした綾ちゃんとお隣の恭子さんにオススメしてみました。あ、恭子さんのブースはマッサージのコーナーだったんだけど、もう店じまいしてるのです。

この薔薇水は香水や化粧品などに使われているもの——こちらが主流？——ではなくて、れっきとしたドリンク。

台湾で買ってきたもので、瓶に入った一見柔らかいジャムに見えるものを水に溶かして飲むのです。瓶の表示を見ると薔薇の花のエキス、蜂蜜、麦芽その他が材料らしい。色は薔薇色（恭子さんは「ネットでペルシャ産の『飲むローズウォーター』っていうのを見たことあるけど、あっちは透明だったわね」って言ってました。機会があれば飲み比べてみたいかも）。芳醇だけど香水ほど強くない柔らかな薔薇の香りに、香りがそのまま味になったようなやさしい甘さ。もろうクセになっってしまう一品なのです。

作り方がわかるなら自分で作りたいな。あゝ、でも薔薇の花びらがいっぱい要りそう。うーん。

ちなみに台湾で見つけたドリンクはただ今絶賛マイブーム。

美人氷果茶は粉を水またはお湯で溶いて飲むものだけれどハイビスカスとリンゴのほのかな酸味と甘みがこれまた美味しい。私は冬にホットで作って気分によって蜂蜜を足して飲むのが好き。

それに仙草（炭入り）ドリンクは最初ちょっと独特の苦みが感じられて失敗かな？と思ったけれど、二杯目からは気にならなくなっ  
てこれまたグー。ウィキペディアで調べてみたら仙草は漢方でも使  
われたりするそうで、香港やシンガポールでは暑気あたりに効果が  
あるデザートとしてゼリーにしたものが人気だとか。たしかに少し  
とろっとしてるし、寒天入れて固めてミルクとかかけたら美味しそ  
う。

ともあれピッチャーにまとめて作って氷で冷たくした薔薇水は綾  
ちゃんにも恭子さんにも大好評。自分の好きなものが他の人にも気  
に入ってもらえると嬉しくてたまらない。

こうして美味しいものを飲んで、今回の収穫やお互いのオススメ  
情報などを三人でおしゃべりしながら、まったりと終了時間を待つ  
ている時のことだった。

## 01話 フェア会場にて 1（後書き）

公子サマが出なくてすみません（汗）。

正式名称は知りませんが、‘薔薇水のもと’は実在します。本当に美味しいです。でも、バラのジャムを水に溶かしても同じ味にはならないそうです（試した友人の言）。

美人氷果茶と仙草（炭入り）ドリンクも実在します。

## 02話 フェア会場にて 2（前書き）

『 』の中は日本語以外の言語です。ちゃんと英文とか入れられればカッコいいのですが、いかなせん赤字すれすれだったので…  
…ご勘弁のほどを。



## 02話 フェア会場にて 2

会場の入口の方から少しずつざわめきが近づいてくる。最初は気づかずお喋りしていた私たちも、そのざわめきが近づくにつれキャーという歓声も混じってくるにさすがに気になって会話が止んだ。

何だろうね？なんて三人で首を傾げつつもわざわざ立ち上がった確認しに行く気も起きず、かといってお喋りも中断してしまったので、ピッチャーに残っているローズウォーターをコップにつごうかとバックヤード側のテーブルに手を伸ばしたところ。

綾ちゃんと恭子さんが「ぽかーん」と口をあけて私の後ろ——通路側を見ていた。

わー、こういうのを「ぽかーん」ていうんだ。なんて感心して、思わずまじまじと見つめちゃいました。

少し間抜けに見えるかも、なんて思っちゃったのは二人には内緒ね。

でもさすがに「可愛い」系の綾ちゃんと「美人」系の恭子さん。ちよっとくらい間抜けて見えてもやっぱり可愛いしやっぱり美人。ちなみに私は「普通」系です。

・・・なんてぼおとしちゃった私の耳に

『~~~~~』

柔らかな声が届いてハッと引き戻された。

振り返ると、商品を置いてあるテーブルの向こうから淡い金の髪に縁取られた美形サマがにっこり微笑んで立ってらっしゃった。

う、わー。

綾ちゃんと恭子さんの「ぽか〜ん」の原因ってこれですかー。  
思わず私も「ぽか〜ん」の仲間入りしてしまいました。

身長は優に185cm越えていると思います（160cmの私が  
けっこう角度をつけて見上げちゃうので）。彫りの深さとすつと通  
った鼻筋は明らかに西洋人の顔立ちなのに、どこか東洋人っぽさも  
滲んでいるかな。紺のスーツを着て立っている姿に、どこかキラキ  
ラしいもの（オーラっていうの？）を感じているのは、きっと私だ  
けではないはず。

リアル王子さまだー。

『~~~~~』

「驚かせたみたいで申し訳ありません。」

柔らかなテナーに続いて耳に飛び込んできたボーイ・ソプラノの  
日本語に「ぽか〜ん」から引き戻されました。

ボーイ・ソプラノの主を見ると、金髪美形サマの左に黒いスー  
ツを身につけた12〜13歳くらいの少年が。こちらは日本人と同じ  
黒髪に黒目。日本人なのかな？でもちょっと深い顔立ちで、ハーフ  
っぽい。

やっぱり整った顔立ちをしているけれど、なんか無表情でもった  
いないなって思ってしまう。

『~~~~~』

金髪美形さんが何か——英語じゃないと思う——を喋ると黒髪の  
少年が日本語で話す。

「おくつろぎのところをお邪魔してしまったようですね。」  
通訳さんなのかな。まだ小さいのに偉いね。  
つい、にっこりしちゃいました。

「うおっほん！」

今度は咳払いで引き戻されました。

咳払いの主は金髪美形サマの右側に立ってた方。

こちらは白に近い灰色の髪をぴったり後ろになでつけて、きれいに整えた髭を蓄えた、50代後半の男性で。

きょ、なんかもう、いかにも「執事さん」っていう格好の人。着ているスーツもビジネススーツとは違って、テレビで見た執事服そっくり！もし名前が「セバスチャン」だったらどうしよう？（いえ、別にだからどうというわけでもないんですけど。）

『――――』

仮称・執事さんが英語で喋っているのはわかるんだけど、流暢すぎて聞き取れません。ひゅん。英語って辞書を引きながら読むのと書くのは（単語を並べるだけだけど）何とかなるのだけれど、聞き取るのと話すのはさっぱりなのです。

ついでに言うと、漢方への興味があったので第二外国語は中国語や韓国語でした。まあ、日常会話も微妙な程度だけれど。

冷や汗をたらす私に、またも小さな通訳君が日本語に変換してくれる。

「お嬢さん、こちらのお方はクロウシェン公国の第三公子、クラウド・シエルツェン・フォン・クロウシェン様です。」

王子サマじゃなくてコーシサマ・・・

講師？公使？

とつさに字が浮かばなくて（ボケたわけじゃありません）首を傾げる私に

「貴族の‘公子’です」

通訳の少年がぼそっと教えてくれた。



## 02話 フェア会場にて 2（後書き）

人物の容姿の描写が難しいです……。

主人公はぱっと見は「普通」ですが、「よく見るとけっこう可愛い」のだと思います。

フェア会場はあと1〜2話で終わる予定です。

### 03話 フェア会場にて 3 (前書き)

公子サマの国は架空の国です。但し、設定などは実在の公国のモノを参考にしていきます。



触れたのはほんの一瞬だったのに、なんだか頬が熱い気が・・・  
顔が赤くなっていたら恥ずかしいかも・・・

いやいや、紙コップが小さいんだから、公子サマの大きな手が触れたって当然なんだから。

[illegible]

「確かに、薔薇の良い香りがしますね」

量が少ないからすぐに飲み干したらしい公子サマ。

紙コップを受け取ろうと両手を伸ばすと、思いがけないことに右手を取られた。

え？もしかして握手ですか？

とっさにそう思った次の瞬間、手の甲に柔らかな感触が。

ほえっ？一瞬固まってしまいましたヨ。

ええ、ご想像のとおり、公子サマが私の手の甲にくっ、唇を付けて下さったわけです。

慌てて手を引こうとしたら、思ったより強く握られていたみたいで、逆に私の身体がバランスを崩して前のめりに。

といつても漫画みたいにすっ転んだりはしませんでしたよ。すぐ前には長机があるのでそこに左手をついて支えましたとも。

でも、ホツとしたのもつかの間、「お見苦しいところをお見せしてすみません」と謝ろうと顔を上げたところに公子サマの顔がアッ  
プになって・・・・・・

えええええー！！！！

今度は唇にキスされました。

一歩後ろに飛びずさつて——いつの間にか手を離してもらつていたように、今度は下がれた——唇を両手で押さえる私。



触れていたのはほんの一瞬ですけど、でもでもっ！

今度こそ顔が真っ赤に違いないでしょう。か、顔から火を噴きそう！

私は勿論、恭子さんも綾ちゃんも、それから通訳君も執事さんも――変わらずにここにこしている公子サマ以外みんなみんな――ぎよっとして固まっているような感じでした。

『~~~~~、~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~』

公子サマの変わらず柔らかな声が通訳少年の硬直を解いたように「あ、あの・・・、びっくりさせて申し訳ありません。こちらのお国では、このような挨拶は一般的ではありませんでしたね」

そ、そうですね、単なる挨拶ですよね？

周りからも「な〜んだあ」という感じのほっとした雰囲気が漂った。

あれ？執事さんと通訳少年はなんだか微妙〜な表情しているみたい????

そこへ公子サマの後ろに立っていた黒いスーツの男性が声をかける。

今まで気づかなかったけれど、背後に同じような黒っぽいスーツの男性が四、五人立っていたらしい。

もしかして要人警護、エスपीとかいうお仕事の方!?

頭の中では状況認識しているのに、さっきからずっと口を手で押さえて固まったままの私に再度微笑んで、公子サマご一行は会場の奥へ進んでいった。

### 03話 フェア会場にて 3 (後書き)

あと少しでフェア篇は終了ですが、きりが良いので話を分けることにしました。

## 04話 フェア会場にて 4（前書き）

フェア会場最終話です。  
短くてすみません……。

## 04話 フェア会場にて 4

「清香さーん、いつまで固まってるんですかー？」

ご一行様の姿が見えなくなってからそう声をかけてきたのは綾ちゃん。

「そうよ、今どき挨拶のキスくらい、さらっとこなさなきゃ」  
ポンと肩に手をかけて、軽く揺すってくれたのは恭子さん。おかげで硬直が解けました。

「今のすごかったわねえ。横顔をチラッと見たんだけど、美形じゃなかった？」 お向かいのパワーストーンのお姉さんも加わってきました。

「何？キスもらったの？」

「そうなんですよ、やっぱり西洋のヒトってキスが挨拶なんですね、生で見れてラッキーです♪」

「そうそう、なのに清香ちゃんたら真っ赤になって固まっちゃうんだもの、もったいないと思わない？」

「うっそ、ほんっともったいないわね」  
私をそっちのけで盛り上げる皆さん。

「ちよっと初心うぶすぎない？今幾つだっけ？」

「二十四、ですけど……」

「やーん、清香さんたらまた顔赤くなってます、かわいー！」

あうあうー。だってしょうがないじゃないですかー。彼氏いない歴イコール年齢なんだから。あれがファーストキスだったんだから！。

なんて、言ったらまた騒がれそうなので口にはしなかったけれど。ついさっきの感触が思い出されたりして。

挨拶、挨拶、単なる挨拶よ……ね？

・ ・ ・ ・ ・でも、離れ際になんかペロツと舐められた気が・ ・ ・  
・ ・ ・いやいや、気のせい、気のせい。欧米のごあいさつ。

懸命に自分に言い聞かせる私。

そうこうしているうちに、フェアの終了時間がやってきて、いつの間にか彼氏談義になっていた他の皆も解散して、慌てて後片付けに移った。

## 04話 フェア会場にて 4（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

最初の妄想はこのフェア会場だけだったのですが、この連載はまだ続きます。

よろしければもうしばらくお付き合いください。

## 05話 帰宅途中にて（前書き）

傍から見ると「犯罪にしか見えません」という表現があります。

## 05話 帰宅途中にて

午後6時には片づけを終えて会場を出た私たちは、ちょっとした打ち上げ代わりに癒しコーナー有志で晩御飯を食べ、8時くらいに店を出た。

みんな帰る方向はばらばらなので、フェア会場近く中華料理屋に入ったのだけれど、料理はとても美味しかった。

特にデザート烏龍茶ゼリーが絶品でした！烏龍茶という名前なのに、さっぱりした紅茶をそのままゼリーにしたような風味。でも、以前日本のスーパーで買って食べた紅茶ゼリーのくどくベタついたような甘さが無く、いくらでも入りそう（料理をあれだけ食べたのに！）。持ち帰りが無いのが残念！

お店の前で解散して、JR組の人と駅まで一緒に歩いて、私一人だけバスなので、只今着替えの入ったキャリーケースを引いてバス停に向かっていく途中（ホテルはもちろん今朝チェックアウト済み）。

ちょっと辺鄙な路線で、駅前のバスターミナルからは出発せず、いささか離れたバス停まで歩かなきゃいけない。おまけに本数も少なく一時間に一本しかない。22時台が最終なので、それを逃すとタクシーになるのだが、ビジネスホテルに泊まると変わらないくらいかかってしまう（泣）。

とはいえ四日ぶりの我が家、待っている皆にも会えると思うと足取りだって軽くなっちゃいますよ、おねーちゃんは今！

目的のバス停を目前に信号待ちをしていると、目の前にすっと止まった黒塗りの車。

大きい！エンブレム付き！！でも、なんで横断歩道に停まるの？



??

もしかして危ない職種のヒトの車では、と一步下がった私の前で、後部座席のドアが開いた。

おや？

中に座ってらっしゃったのはフェアに来ていた公子サマと一緒に来ていた執事さんと通訳少年。

おおっと、後部座席が対面式だなんて初めて見ました。だからこんなに大きいんですね。

『――，――』

「どうぞお乗りください」  
は？

一瞬何を言われたのか意味がわからなかった私。

『――――，――――』

「長く停まっておくことができません、早く乗ってください」

そう言われなくても、どうして乗らなくちゃいけないかがわかりません。

「あの、遅くなってしまうので失礼します」

ペコリとお辞儀をして、車の後ろを回り込んで青になった信号を渡る。私の乗る予定のバスが、スピードを落としながら追い抜いていった。

良いタイミング！あれに飛び乗っちゃえばあとは一時間半くらいで我が家です！！

と思ったら、左腕が掴まれて引き止められる。

えっ！？

振り向いたら、黒いスーツの背の高い男性が二の腕を掴んでいるではありませんか。男性の背後には、こちら側の後部座席の扉が開いた、今だ停まったままの黒塗り。

さっきは執事さんと通訳少年しか見えなかったけれど、その向こ

う側に乗っていたらしい。とっさに反応できない私を黒スーツの男性はするする引っぱっていき、キャリーケースごとぽいと座席に放り込んだ。

「な、な、なっ——」

悲鳴を上げる間もなく、黒塗り車は出発。

「何するんですか！これは誘拐ですよ、犯罪です！！」

慌てふためく私に、執事さんは落ち着きはらって言った。

『————，————————————』

「心配御無用です。この車は外交官ナンバーですので治外法権です」  
そんなこと心配してませーん！！

## 05話 帰宅途中にて（後書き）

いくら青プレートでも犯罪は犯罪でしょう（苦笑）。

烏龍茶ゼリーも実在します。台湾で食べ、文中のとおりでとても美味しかったです。

後日、日本のスーパで紅茶ゼリーというのを発見し、同じ風味を期待して食したところ、べたつくような甘さに泣きました。

そろそろ書き溜めていた分が尽きそうです。

いよいよ本当の亀更新になると思いますが、よろしければ気長にお付き合いください。

## 06話 連れて行かれたホテルにて 1 (前書き)

すみません。

どうかリァリティーは求めない方向でお願いします……。

## 06話 連れて行かれたホテルにて 1

そのまま十分くらい走って連れて行かれたのは、私みたいな庶民は絶対に足を踏み入れないようなVIP様御用達の超高級ホテル。その最上階のなんたらスイートというスペース。

‘スイート’って何種類もあるものなんですね。初めて知りました（こんな知り方したくなかったですけど・・・）。

いやもう初めて足を踏み入れましたけれど、私が泊まるようなシングルやツインとかいう「部屋」ではなくて「空間」ですよ、「空間」。

今いるのは広いリビングで、向こうにキッチンが見えます。他にも扉が幾つかあって——ウォークインクローゼットや浴室・トイレを除いても寝室って絶対一つじゃないですよ、この扉の数。どこぞの高級マンションと言われた方が信じられます。絨毯はふかふかだし、家具から小物まで高級感でいっぱいです。ベージュ系の落ち着いた色でまとめつつ、下品になりすぎない程度に適度にくすんだ金色を使っているあたりが憎いですネ。

なんてリポーター風に逃避してみました。

バッグとキャリーケースは死守しているが、廊下へ続く扉の前にはやはり黒服の男性が一人さりげなく立っていて、逃げられそうにない。

仕方なく勧められたソファに腰を下ろしたはいいけれど、思ったより柔らかく体が沈むので、ちよつと慌ててしまう。

「あの、いったいどういう用件なのでしょう？ 帰りが遅くなっ  
てしまいますので、手短にお願いしたいのですが……」

『—————』

――――、――――』

「殿下が確認したいことがあるとのことです。只今経済産業大臣との晩餐に行かれていますので、いま少しお待ちいただきたい」

こんな立派なお部屋に泊まっている、しかも公子サマご一行が身代金目当てでもないだろうと尋ねてみれば、執事さんから返ってきたのはそのような回答。

公子サマが確認したいことと言えば、私に思いつくのは一つしかない。

そんなに気に入ったんですね……。

それではと、待っている時間を利用することにして手提げバッグからシステム手帳を取り出す。

うーんと、たしかこのあたりに書き込んだ覚えが……あ、ありました。

目的の情報を見つけて、白いページに書き写す。ちょっと迷ったものの、追加情報をいくつか同じように検索・記入。B6サイズのページを一枚まるまる埋めて手帳から外したところで扉が開く音がした。

手帳を慌ててバッグに入れて立ち上がれば、入ってきたのは夕方にフェア会場で会った公子サマその人。

腕時計をちらりと見ればもうすぐ9時。

この手の中のメモを渡してすぐ出れば、21時台のバスに間に合う！

視線を上げると、おっとびっくり。公子サマがすぐ目の前に立っていた。両腕を広げている。

この体勢ってまるで――――

思った次の瞬間、はい、抱きつかれました。そして私はやっぱりとっさに反応できず硬直です。

## 06話 連れて行かれたホテルにて 1（後書き）

仕事の関係の海外出張で、スイートなどではありませんが、仕事相手の手配でちよつと良い部屋に泊まったことがあります。

ワンルームでしたが広さにビビりました（20畳分くらい優にあったのではないでしょうか）。

身の丈に合った広さが一番だとしみじみ感じました……。

## 07話 連れて行かれたホテルにて 2 (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

不定期な更新で恐縮ですが、絶対完結させますのでどうぞ気長にお付き合ってください。

今回は少々糖度が高め（この作者にしては）かもしれません…



## 07話 連れて行かれたホテルにて 2

『~~~~~』

「ここでお会いできてとても嬉しいです」

これって、ハグっていうのですか？身動きできないんですけど、あいさつ？あいさつですよね！？

『~~~~~』

「昼間とは少し違いますが、やはり貴女は良い匂いがしますね」

匂い？荷物運んだり走ったりしたから汗かいたんじゃ・・・汗臭いってことですか？

『~~~~~』

「抱き心地も良くて、二度と腕の中から離したくなくなりますね」

これ以上締めつけられると本当に息が出来なくなっちゃうんですけど・・・

ただでさえ腕がぐるつと体に回されて、顔がスーツの胸のところ——身長差のせいで公子サマの顎が私の頭の真上にある——に押し付けられて息がしづらい。酸素不足と男性（美形）に抱きしめられている相乗効果で、今私の顔は真っ赤なはず。

いいかげん振りほどかないと、締め殺されて棺桶に入って帰宅とか怖いことに……

『~~~~~』

「ああ、また味見がしたくなりました」

ようやく巻きついていて腕が緩んだ。ぷはーっと息継ぎをしてそのまま一步下がろうとしたが、それより早く、今度は腰の辺りに腕が回ってきて——

ぐいっと持ち上げられました。

へ！？

公子サマの顔が真ん前にあります。

あ、ほんとに睫毛も髪と同じ色なんだ、しかも長い。

なんて思っていたら、今度は（またも？）マウス・トゥ・マウスで口を塞がれた。

後になって考えたら「あたしってホントに学習能力が無い」ってのた打ち回るところなのだけど、いかせんこの時は軽い酸欠で頭もぼんやり。まあ、もともと反応が遅いと言われますけど。あう。

だけど、この時は頑張って抵抗した。床から浮いている脚をバタバタさせて（ジーパンで良かった）、今度は自由な両腕を振り回して。

だって……

いいやあー！！なにに、なんですか！！何か入ってきてるー！！！！！！

息継ぎをしようと大きく口を開けていたのが災いし、公子サマのし、し、した、舌がーっ！っ！！！！

とっさに噛まなかった私を褒めてください。

まあ、正直なところを言えば、この時の私はほんとに息が苦しくて、溺れた時みたいになんかバタバタもがいていた状態だったのだが……

そのおかげか、意識がブラックアウトする寸前で口は解放された。解放されてまずしたことは、当然ながら酸素の補給。ぜー、はー、ぜー、はー。

それから抗議のために相手を睨みつける。が。

うっ、近い。

まだ抱き上げられている状態なので、当然と言えば当然ながら、公子サマの顔が目のある。苦しさから目に涙が滲んでいたが、それでも構わず睨みつけたのに、どうやら通じなかったよう。

ふっと口の両端を上げてまた顔を近づけてきたので、とっさに左手を自分の顔の前に差し込んだ。

『u……』

公子サマの顔の下半分を押さえ込んだ形になった。ぐっじよぶ、左手！

「何をするんですか！」

あれ？公子サマ喋ってないのに声が……？

ここでようやく、さっきから感じていた違和感に思い当たる。

恐る恐る顔を右下に向けると、私たちのすぐ傍に立って見上げてる通訳少年と視線が合う。

……………ということは、つまり……………さっきの公子サマの訳ワカメな発言とかを訳してたのはこの少年ということ……………

さっきのキスも見られてたって事ですな。

「きゃーーーーー、いやあーーーーー！！！」

悲鳴と同時に左手を突き出すと、ぐきっという音がして私を抱えていた手が緩んで床に足がついた。

すぐに逃げ出そうとするが、廊下続く扉の前には変わらず黒服の人。

やむなく反対側を見てまたぎよつとする。

そちらでは執事さんが白いハンカチを両手に持って、‘だーっ’、という擬音が聞こえそうなくらい涙を流しながら『――――、――――』と何事かつぶやいていたのだ。

もお、泣きたいのはこっちですよー。いったい何なんですかー。仕方ないので応接セットの大きなソファの向こうに逃げ込んだ。



## 07話 連れて行かれたホテルにて 2 (後書き)

我ながらいろいろとつつこみどころが……orz

少しはラブコメ風になっていると良いのですが……

## 08話 連れて行かれたホテルにて 3 (前書き)

更新が遅くてすみません。

仕事を立て込んだのと、学校が始まったので……

忙しくなりますが、週1〜2回は更新できるよう頑張りたいです。

また、前回と同じ糖度を期待している方、ゴメンナサイ!!

今回は「執事さんのターン!」でございます。

## 08話 連れて行かれたホテルにて 3

「い、い、いったい何なんですか！ひっ、人を強引に、連れて来て、あんな、あんなことしたり」

せいっぱい睨むが、公子サマにはやっぱり効いてないようで、首を傾げて一歩踏み出してきたので「こっちに來ないでください！」「と慌てて叫ぶ。

またあ、あ、あんなことされたら今度こそ息の根が止まってしまいます！！

パニック寸前の私に、更に追い打ちのようにかかる声。

『――、――、――！！』

「お嬢様、どうか殿下の恋人になってください」

お嬢様って誰ですか！？

あ、つつこむところそこじゃなかった。‘こいびと’？

……って、‘恋人’ですか！？

言葉の意味が飲み込めてからようやく、声が思ったより近くでしただことに気づいて横を見ると、涙を目にいっぱい溜めたまま白いハンカチを両手に持った執事さん。公子サマに氣を取られた間に、ソファを回り込んで来ていたよう。

ぎよっとする間もなく執事さんはソファに置いていた私の両手をガシッと握り、一気に何事かまくし立てる。

『――、――！！』

「どうか、どうかお願いいたします」

『――、――、――！！』

「殿下にお仕えして25年、ようやく、ようやく見つけたのです」

『ワタクシの目の黒いうちはもう駄目かと思っておりました』

『それが、こんな東の島国でみつかろうとは』

『――!!』

『お願いいたします、貴女様が最後の頼みの綱なのです』

『――!!』  
『もしお受けいただけるのであれば、このセパシウス、何でもいたします』

『?』

『住むところはやはり都内の高級マンションがよろしいでしょうか?』

『――』

『宝石や服など、必要なものは何でもお申し付けくださいませ』

『――!』

『ああ、月々のお手当も……』

次から次にまくし立てられて、頭が追いつかない。

見れば見るほど執事さんですね……とか。

セパシウスさんて仰るんですか、セバスチャンじゃないんですか……あ、でも‘セ’で始まるのはご一緒ですね……とか。

目の黒いうちはなんて大げさですよ、まだまだお若いじゃないですか……とか。

‘自分でもちよつと口からなにか白いモノが出てる気がしますわ’、なんて、虚ろになりかけた頭で時間差の脳内回答をしていると、ふと引っかったものが。

ん? ちょ、ちょつ、ちょつと待ってください。



今何か……最後のほう……

住むところ？

服とか宝石？？

月々のお手当？？……って……

それって、まるで……まるで……

本当に、いいかげん、私の頭はいっぱいいっぱいだったのだろう。  
気づいた途端、そこでプチッと自分のどこかが切れた音……が聞  
こえたような気がする。

「それって、私に‘愛人’になれって言ってるんですか？」

自分でも聞いたことがないような、低い、低い、‘地を這うよう  
な’声が出た。

## 08話 連れて行かれたホテルにて 3（後書き）

執事さんの名前は完全に語感でつけてます。

執事さんの興奮具合に反して通訳少年は冷めています。

なので、日本語は「！」マークが抜けています。……とお考え下さい。

でもって次回は「主人公のターン！」です。

更に糖度が減るか……orz

## 09話 連れて行かれたホテルにて 4 (前書き)

主人公のターン！……の前に、彼女の倫理道徳観の大本についての説明となっています。

価値観が多様化した現代で、「古臭い」とか「合わない」等と感じる方もいらっしゃるかと思いますが、彼女の今後の行動原理ともなっていますので、外せないと思い入れさせていただきました。

## 09話 連れて行かれたホテルにて 4

私は10歳の時に事故で両親を亡くし、母方の祖母——おばあちゃんに引き取られた。

祖父は既に他界しており、おばあちゃんは一人で田舎のささやかな土地——家や田畑や山——を守っていた。

自分の子供たち——私の母や伯父、叔母たち——が家を継がず外に出ていくのを許すという、保守的な田舎にしては開放的な考えを持つ一方で、倫理や道德に関しては昔ながらの堅い人だった。

「世の中にはやむを得ずに水商売なんかの仕事に就かなきゃならない人もいる。でも、親に生んでもらった体は大事にしなきゃいけないもんだ。あんなふうに簡単に、安っぽく売るもんじゃない。自分で自分の価値を下げるようなマネを、おまえはするんじゃないよ」

テレビのニュースで出会い系や買春などの報道が流れると、おばあちゃんはそう私に言った。

「貞操はね、あけても良い、なんて相手にくれてやるもんじゃない。この人じゃなきゃ、っていう相手に捧げるもんだ」とも。

私の「彼氏いない歴〓年齢」については、こうしたおばあちゃんの薫陶の賜物だと思う。

まあ、高校まで田舎育ちでご近所さんの目が厳しかったっていうのもあるかもしれない。向こう三軒どころかご町内の皆さんが——物理的には田畑で隔てられているけれど——「お隣さん」並みに強いネットワークで結ばれているのだから。

だけど、大学に通った四年間はさすがに交通の不便な田舎から通うのは無理で、部屋を借りて一人暮らしをしたのだから、それでも私が彼氏いない歴を更新したのは、やっぱり何よりおばあちゃんの

教えの影響だったと思うのだ。

大学での女友達ができる彼氏との話をまったく羨ましく思わなかったと言えど嘘になる。

ただ、それは「私も早く経験したい」とかじゃなくて「そんな相手と巡り会えて羨ましい」という気持ちだったと思う。ちよつと人見知りがちな私は、合コンとかで初めて会う男の子とお喋りするの  
は苦手で、それよりは女友達とお茶したりするほうがずっと楽しかったのだ。

「百姓がお天道様てんとうさまに顔向けできないようなことをしちゃあいけないよ」

それがおばあちゃんの口癖だった。

厳しくて、優しく、大好きだったおばあちゃん。

去年亡くなるまでずっと、そして亡くなってからも、おばあちゃんが、私にとっての‘お天道様’だった。

だから。

‘愛人になって欲しい’だなんて、私にとっては、育ててくれたおばあちゃんを侮辱する、決して許せない言葉、だった。

## 09話 連れて行かれたホテルにて 4（後書き）

予定ではあと二話ほどでホテル篇が終了しますので——本編の終了ではないのですが——なるべく早くお届けしたいと思います。

本当はすぐにアップしようと思っていたのですが、風邪をひきかけているのか頭痛・悪寒・のどの痛み等の諸症状が……季節の変わり目ですので皆様もご自愛ください。

## 10話 連れて行かれたホテルにて 5 (前書き)

本格的に風邪をひきました。

一週間熱が下がらず……微熱ですけど、長引くとつらいですね。  
本当はもっと早く投稿したかったのですが……すみません。

主人公のターン！

本当は少し内気な（はずの）清香さんですが、怒ってちょっとキテます。

彼女のセリフの内容は、彼女の道徳観に基づいたモノですので、違和感を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが。ご容赦ください。

## 10話 連れて行かれたホテルにて 5

「人を侮辱するのもいい加減にしてください」

目の前の執事さん——もとい、セパシウスさんを睨みつける。

握っていた私の手をぱつと放したセパシウスさんの横を回り込み、つかつかと応接セットの脇まで進み出る。

絨毯の上にそのまま正座で座り込み、

「貴方と貴方、ちよつとここにお座りなさい」

‘貴方と貴方’と言いながら私が指さしたのは、セパシウスさんと公子サマ。‘ここ’と言いながら指したのは私の前の絨毯の床。

『く、く………』

『———』

びっくりした顔で何か喋ろうとする二人を

「いいからここにお座りなさい！！」

私の怒鳴り声——あくまでも低い——が遮る。

迫力に押されたのかおとなしく座るお二人。といっても胡座状態<sup>あぐら</sup>。

「これからお説教するんです。靴を脱いで良いので正座をなさい！！！」

通訳少年の説明を受けて、慌てて靴を脱いで正座するお二人。

いつもの私だったら、お二人だけじゃなく通訳少年や黒服さんたちもがつられて正座している様だとか、勢いで両手が膝の上にピシッと伸びている——いわゆる居住まいを正している——様だとかに笑っちゃうところなんだろうけれど（というか普段ならこんなこと絶対にできないです）。

どこかが切れている私はすっかりお説教モードに入っていた。

「それは確かに、買春’とか風紀が乱れているきらいはありますが、



そんな女性ばかりじゃありません！

「そもそも貴方はなんですか！会ったばかりの女性に抱きついたり、き、キスしたり……」

「その上、あ、あ、愛人になれだなんて、人を侮辱するにも程があります！」

「それとも何ですか！？東の果ての島国の庶民の小娘なら侮辱しても構わないって言うんですか！？」

お二人に向かって一気に喋る私。

『――，――，――，――，……』

「あのー、‘愛人’、と言うのは……」

恐る恐る話すセパシウスさん。

「住むところに宝石だの服だのに月々のお手当だなんて愛人としか聞こえないでしょう！私にとっては侮辱以外の何物でもありません！！」

セパシウスさんにそう言い返すと、公子サマを睨みつける。

「だいたい、日本にはお仕事で来ているんですよね？」

『く、くくくくくくくくくく』

「公国の公務です」

柔らかに答える公子サマ。

「公務ということは税金が使われているんですよね？」

こっくりと頷く公子サマに、私はすうっと息を吸うと

「税金使って愛人探しするなんて、恥を知らない！！」

今までで一番の怒鳴り声を浴びせた。

「税金は、国民が汗水垂らして稼いだお金であることは貴方も知ってるでしょう！」

「税金を使うということには、国民に対する責任も伴っているんです。」

「貴方は、自分の行いを国民の皆さんに胸を張っていえますか！？」  
私の言葉に、心なしかしゅんとなる公子サマ。

『――――、――――――――』

「住まいとかお手当などはワタクシが勝手に――」

責められる公子サマを見かねたのか、口を挟むセパシウスさん。

「貴方も貴方です！」

びしいつとセパシウスさんに指を突きつける私。

突きつけられた方はたじたじになっている。

『――――、――？』

「ワタクシ……ですか？」

「そうです！」

「貴方の方が年長者として分別が有って然るべきでしょう。それを止めもしないばかりか愛人条件の交渉とは言語道断！！」

「25年も仕えた大切な主なら尚更です！貴方が諫めなくてどうするんですか！？」

言葉もなく鯉みたいに口をパクパクするセパシウスさん。やがて

『――――――、――――――――』

「申し訳ございません。ワタクシの不徳の致すところでございます」  
詫びが入りました。

改めて公子サマに向き直る私。

「貴方がどう思おうと、海外にいれば周囲は貴方の振る舞いを通して貴方の国を見ます。」

「貴方が無分別な行いをすれば、貴方の国貶めおとしられるんです。」

「これからは、ちゃんと国を背負っているという自覚を持って行動してください。いいですね！？」

私の勢いに押されたのか、黙ってこくこくと頷く公子サマとセパシウスさんと通訳少年。

これで私のお説教は終わった。

ふう、と一息ついて部屋を見渡せば、お説教された皆さん――公子サマやセパシウスさんばかりでなく他の皆様まで、私の気のせいでなく小さくなっている。

……え〜と、ちょっと言い過ぎましたでしょうか？

## 10話 連れて行かれたホテルにて 5 (後書き)

10話までいってしまいました。

次でホテル編は最後です。

当初の妄想はフェア会場で終わっていたのに、それがホテルまで続き、とうとうその後まで……

よろしければ続きもどうぞお付き合いください。

## 11話 連れて行かれたホテルにて 6 (前書き)

引き続き主人公のターン……？

と、とりあえず、ホテル編の最終です。

## 11話 連れて行かれたホテルにて 6

言いたいことを言ってしまうと、ちよつと頭が冷えてきた私。

なんか、もしかして、とんでもないコトをしましたでしょうか？  
……というか、もしかしくなくても、確実に、しました、よね？

一国の貴族の公子サマご一行に、庶民且つ若輩者の私がおこがましくもお説教をたれるなんて、ナニサマのつもりなんですか、私！

そう気がつくとし怖くなって、公子サマをそろつと見ると、相手はうなだれて上目遣いでこちらを伺っている。

うゝっ！なんか、叱られて耳やしっぱが垂れた大型犬に見えます。クーンという声まで聞こえてきそうです。

いやいや、これは気のせいです、気のせい。

首を振って幻を振り払い、もう一度公子サマに目をやると。

うゝうゝっ！鼻血を噴くかと思いました。

だってだって、うるつと潤んだ上目遣いで「ごめんね？ゆるしてくれる？くれるよね？？」って目でこっちをみてるんですよっ！！  
幻には違いないのにへなつと伏せた耳とか、しょぼんと垂れた尻尾が見えます。

・・・くっ、なんて凶悪に可愛いんでしょう！！！あれですか、金髪ってことは、金毛のゴールデン retriever とかですか！？

いやいや、私より年上の成人男性に‘かわいい’は無いですよ、  
‘かわいい’は！ 幻覚にもほどがありますっ！ ああ、でもでもっ！！

思わずナデナデしようと手が伸び、はっと気づいて止める。

だめです。家には可愛いコたちが待っています。ここで幻覚に浮気している場合ではありません！

みんな、ごめん！ココロが揺れたおねーちゃんを許してね、ちゃ

んと帰るからっ!!

私は大型犬モドキの幻を振り切り勢いをつけて立ち上がる。

「私の言いたいことはそれだけです。差し出がましいことを言いましてすみません。失礼しますっ!」

深々とお辞儀をし、急いで荷物を持って部屋の出口である扉に向かう。

『――!』

「待って・・・うわっ!!」

悲鳴に振り返れば、部屋の皆さん一斉に四つん這い。

あゝ、足が痺れたんですね。

公子サマも、セパシウスさんも、通訳少年も、その他黒服の方々も、何の合図もないのに揃いも揃って足を痺れさせて四つん這い……って、何のコントですかって笑えるくらい滑稽な光景だったが、私は逃げることで頭がいっぱいでそれどころではなかった。

ラッキーなことに、扉の前に立って逃げ道を塞いでいた黒服さんも足が痺れて立てずがつくりポーズ中で、背後には私が通り抜けるスペースが空いている。

そこをすり抜けて外に出ると、廊下には誰もいなかった。

更にラッキーです。

この階に連れて来られる時に乗ったエレベーターに向かって早足で歩く。不審者に思われないうに。でもできるだけ急いで……。今呼び止められたら心臓が止まってしまいうんじゃないかというくらい緊張していた。

幸い呼び止められることもなく、エレベーターも一階までの直通で、五分とかからず外に出られた私は、ホテルの前の客待ちタクシーを避けて通りがかったタクシーを止めて乗り込む。

……けしてサスペンスドラマを意識したわけではないです。

ええ。

駅前まで急いでもらうよう運転手さんに伝えて、発車したところで振り返ってみたが誰も追ってくる人はいなかった。

まだ皆さん足が痺れているのでしょうか？靴を脱いで良いとは言ったけれど、普段正座とかしない方たちばかりでしょうから無理もないでしょう。

合掌。

その後、無事最終バスに間に合った私は、予定以上のぐったり感を抱えて座席に沈み込んだ。

ほんとに疲れました。はあ……。



## 11話 連れて行かれたホテルにて 6 (後書き)

ホテル編終了です。でもお話は終わっていません。

最初はフェア会場でキスされて呆然……で終わっていた妄想だったのですが、今となってはそんな‘ささやかさ’は他の銀河に逃げて行ってしまったような気がします。orz

見直すと、投稿間隔がじわじわと開いてきていて申し訳ございません。

続きを楽しみにしてくださいる方には大変恐縮ですが、今週はリアルで仕事を立て込む予定に加え週末は遠出しなければならぬため、もっと間隔が開いてしまうかもしれません。orz×2

ど、どうかご容赦ください。

## 12話 翌日自宅にて 1（前書き）

予告どおり（？）間が空きましてすみません。

先週末仕事で遠出したのと、以前からひいていた風邪が帰宅後悪化しまして……。

病院も行きましたが咳が止まりません。毒の床の上を歩いたわけでもないのに、地味くに体力を削られています。

今年の風邪はたちが悪いです。皆様もどうぞご注意ください。

でもって、翌日です。

## 12話 翌日自宅にて 1

ピピピッ、ピピピッ、ピピピッ、ピピピッ、ピピピッピピピ、  
ピピ、カチッ。

目覚ましの音で目を覚ました。完全には開いてくれない目を擦りながらベッドに身を起こすと、時計の針は7時。

うーん、いつもは目覚ましより先に起きるのに、なんで今日は目覚ましに起こされたんでしょう？それになんだか寝足りない気も……？

昨日、何か疲れるようなことあったでしょうか？  
ぼんやり頭で記憶を巻き戻す。

最終の高速バスに乗って最寄りのバス停——温泉前——に着いたのが夜11時半頃。私の家まで更に車で15分くらいかかるのだが、この時間だとバスもなく、温泉のタクシーももういないだろうからどうしよう……と思っていると、背後からクラクション音。

振り返ると一台のタクシーがいて、運転手は近所に住んでいる中原のおじさんだった。お仕事は上がったのだが、私が帰っていないので心配して待っていてくれたらしい。

「帰るついでだから乗っていきなさい。」というお言葉に喜んで甘えることにした。

田舎暮らしの人付き合いのコツの一つは、返せる範囲の好意は素直に受けることだと思う。もちろん、受けっぱなしは良くないから、心からの感謝の言葉とフェアで買っておいたサーモンの缶詰——おつまみにしても美味しい一品——を渡す。

こうなることを見越して買っていたというわけではなく、もともととお土産にしようと思って買っていた物の一つ。翌日すぐに持って行くつもりで宅配にしなかったのが思いがけず役に立った形である。

中原のおじさんも「いつも悪いね」なんて言いながら嬉しそうに受け取ってくれた。

……それはいいんですけど、えーと、どうしてそんなに遅くなっ  
たんでしたっけ……???

そう思って記憶の時間を巻き戻し——  
!!!!

思い出しました!

フェア会場に来た公子サマにファーストキス奪われて、帰りがけ  
にそのお付の人——セパシウスさんでしたっけ?——に拉致され、  
連れ込まれたホテルで再度公子サマに抱え上げられて……って!?

あれって、あれって所謂‘ベロチュー’ってやつですか!!  
うわああああ。

一気に思い出してしまい、ベッドの上で思わず頭を抱えてのたう  
つ私。

いくら一晩寝ると嫌な事を忘れてしまうとはいえ、ちょっと忘れ  
すぎでしょう、自分!!

ひとしきりのうち回って、いつもの起床時間を1時間近く過ぎ  
て、ようやくベッドから出た……。

……ええと、とりあえず、やっぱり忘れることにしました。まあ、  
二度と顔を合わせることも無いでしょうし。

それに、まさか外国の要人を正座をさせちゃって足を痺れさせた  
からといって、逮捕されたりしませんよね? 警察もそんなヒマじゃ  
ないでしょうし……たぶん。

朝食は軽く焼いた食パンに、これまたフェアで買ったカナダのメ  
ープルスプレッド——メープルシロップから作ったクリーム——を  
たっぷり塗ったものに、インスタントのオニオンコンソメスープで  
簡単に済ませる。

オニオンコンソメスープは手軽に野菜が摂れる一品だし、メープルスプレッドはメープルシロップと同じ風味で、でも控えめな甘さがたまりません。ピーナツクリームとか好きな人にはぜひ食べてもらいたい一品です。

いつもはこんな手抜きではないのだけれど、帰宅も遅かったし、まあ例のどたばたで疲れきっていたので、お米を研ぐ気力も無く。おまけにフェア出展で数日間留守にするからと日持ちのしない物は処分していて冷蔵庫の中はほとんど何も無い状態。今日の午後はスーパーにお買い物に行かなくては、と心のメモに書き込む。

お皿を水につけると、身支度をして‘家族’を迎えに家を出た。

## 12話 翌日自宅にて 1（後書き）

メーブルスプレッドも実在します。

毎年気になってましたが、とうとう今年買いました。  
甘党にはたまらない美味しさです。

## 13話 翌日自宅にて 2

私が向かった先は本家。

本家と言っても、地元の名士の家だとか豪邸というわけではなく、私の何代か前のご先祖が分家したその大元の家という意味。ちなみにこの地元では、分家した家のことを‘新家’<sup>しんや</sup>と呼ぶ。

本家に行くには田畑の畦道を歩いていくのが最短距離で、私はいつものように人ひとり分の幅の土の上を歩いていく。水の張った田んぼには連休中に植えられた緑色の小さな稲の苗が並んでいて、なんだか見るだけでちよつと楽しくなってくる。

兼業農家——普段は会社勤めをしている人など——は、この連休で一斉に田植えをすることが多い。ちなみに私は比較的時間の融通がきくし、連休はフェアに出展することもある。連休前に田植えを済ませた。

このあたりは農地の区画整理——昔ながらの段差のある小さい不均一な田んぼを四角い大きな形に整地する——が進んでいて、農業用機械（トラクターとか田植え機とかコンバインとか）を使いやすいようになっている。ここよりもっと奥の地域だと、棚田の段差が大きすぎて整備できないところもあったりする。

空はよく晴れていて、着古したシャツにジーンズ姿の私を時折風が撫でていく。稲や踏みしめる草の香りに、帰ってきたんだという実感が湧いて心が弾み、足取りも軽かった。

本家の敷地に入ると右手には手入れの行き届いた植木と池。規模は小さいけれど、ちゃんとした日本庭園（風？）。これはこちらの

お爺ちゃんのご趣味である。

お家の縁側の方から、キャンキャンと興奮した犬の声。

「きゃー、四日ぶりだねっ、元気だった？」

鎖の長さいっぱい飛び出てきて後足で立ち上がり、しっぽをバタバタ振り回してお出迎えしてくれたのは、本家に預かっていただいていたムウくん（ミックス・雄・推定2歳）。体の大きさや顔つきは柴犬っぽいんだけど、毛足が少し長くて、尻尾も丸まってなくてブラシみたい。柴犬の茶色よりは少し濃い茶色で、元気いっぱいのやんちゃ坊主である。

ムウくんの後ろでどっしりと構えて静かに丸まった尻尾を振っているのは、同じく預かっていただいていた秋田犬の白雪さん（雌・11歳）。名前の通り真っ白で、日本犬で唯一の大型種と言われる存在感からくる威厳なのか、彼女のことは誰もが「さん」付けで呼ぶ。私は「シイさん」と呼んだりするのだけど、シイさんの方は絶対に私のことを「孫、かせいぜい、娘、――いずれにしても後輩――だと思ってるよう。

二匹の体をさんざん撫でまくる私。ああ、このふわふわもこもこに癒されますー♪

「おはようございまーす」

本家のガラスの引き戸――このお家は家と離れの間屋根をつけてそこにも戸をつけている――を開けて土間に入り、そのまま勝手口の扉を開けてご挨拶。

「あら、清香ちゃん、おはよう。もうあのコたちを迎えに来たの？」

朝ごはんは食べた？」

台所にいたのは順子おばさん。ふっくらした体つきに丸い顔にはいつもにこにことした笑みを浮かべている。

「はい、軽く食べてきました。これ、お土産です」



私が差し出したのは、フェアで買ったワイン1本とプーアル茶葉の徳用袋。本家へのお土産のうち、酒類は男衆用で、茶葉類はおばあさんや順子おばさんたち女性陣用。

「本当に気を使わなくていいのに。いつもありがとうね」

やっぱりにこにこと受け取る順子おばさん。

「こちらこそ、いつもあのコたちを預かっていただいてありがとうございます」

「いいのよ、ムウちゃんも白さんもとっても良いコだもの。子供たちもすっかり大きくなって小憎たらしくなっちゃったし、あのコたちがいてくれると私も楽しいもの」

と、そこで、ずっとにこにこしていた順子おばさんの顔が少し曇る。

「でも、日向ちゃんがねえ…」

ああ、やっぱりですかあ……。

‘日向ちゃん’、というのは、我が家のもう一匹の家族であるイシガメのこと。推定年齢15歳の最古参である。私が小さい時にお祭りの夜店で買ってきたコで、名前のとおり日向が大好き。我が家で庭の池——リフォームの際に要らなくなった古い風呂桶（五右衛門風呂の）を庭に埋めたもの——で暮らしているせいか、まず水槽に入られるのがとにかく嫌いで、本家に預けてもいつの間にか脱走して我が家に戻ってくる。本家の岩の池に放しても戻ってきてしまうのだ。

そんなに五右衛門風呂が良いのかしらとあきれるのが半分、よくまあ毎回ちゃんと帰って来ますねえと感心するのが半分。今となつてはいつものことと諦めてますけれど。

順子おばさんにもう一度お礼を言って、ムウくん和シイさんと一緒に本家を出る。

「久しぶりだから、ちょっと散歩して帰ろっか？」

二匹にそう言うと、ひとときわ激しい尻尾の振りが返事として返ってくる。

家へ帰るのとは違う方向へ、畦道を歩き出した。

畦道は不思議です。辿っていると、時間が経つのを忘れてしまいます。

家の近くまで戻ったときには11時前。買い物に行かなければお昼ご飯の材料が無いことを思い出さなかったらもっと遅くなっていたかも（汗）。

二匹を庭につないで水を入れたボウルを置き、ついでに日向さんが無事に戻っているのを確かめ、家に入ろうとすると、

プップー！

聞こえてきた車のクラクションの音。

音の方向に目を向けると、白い軽トラックが庭に入ってくるところだった。運転していたのは祥くん――‘祥二’という名前で本家の次男坊、ちなみに私の幼なじみ――で、助手席に誰か乗せている。それはいいのだが、ぎょっとしたのが、軽トラックの荷台に4人くらいの人が乗っていること。

うわぁ、おまわりさんに見つかったら止められちゃいますよー。

……と言っても、最寄の交番は温泉の近くにしか無くて、ここいらには滅多に来ないんですけどね。……いやいや、そういう問題じゃありません。

よく見ると、皆さんスーツ姿で体育座りをしていまして、こころなしかタソガレているような雰囲気が……。

……………ドナドナ……………？

## 13話 翌日自宅にて 2（後書き）

主人公の自宅は農村地域にあります。

モデルは作者の親の実家ですが、あくまで参考ですので、用語などから心当たりがある方はスルーを御願いできないでしょうか。

また、農業用語については、専門家ではないのでざっくりとした表現にしています。

読んでいただきありがとうございます。

次である方再登場の予定です。

## 14話 翌日自宅にて 3

「さやー、おまえに客だぞー」

軽トラックは庭に入ってすぐのところでは止まると、祥くんが運転席から降りてきて、私のほうに足早に寄ってくる。その距離約10m。

あれ？

「祥くん、今日お仕事は？」

今の祥くんの格好は、上はTシャツに下は作業ズボン。首に白いタオルをかけて、腰に作業上着を袖で結び付け、履いているのは黒のゴム長靴——どう見ても作業用。

小さいときから外を走り回って遊んでいたせいですっかり色黒だし、剣道の道場に通っていてずっと竹刀を振っていたせいで体も引き締まっているし、加えて今の格好だとしてもそうは見えないけれど、これでも本業は地方公務員——役場の職員（しかも事務屋さん）——である。

たしか、公務員はカレンダーどおりの勤務、とか言っていたので、今日は出勤していなきゃおかしいのでは……？

首を傾げる私に向かって、祥くんはあっさりと

「ああ、年休取った」

と教えてくれた。

「畑の準備で終わらないトコがあったんで今日休んだんだよ」  
そういうことですか。納得です。

「それより、お前の家を探している連中がいたから連れて来たんだけど、心当たりあるか？」

そう言えばさっき私に、客、って言ってましたね。

軽トラックに目を向ければ、荷台にいた方々が降りているところだった。黒っぽいスーツの二人が先に飛び降り、残りの二人に手を貸しているよう。小柄な……というより子供？の方は抱え上げられるように降ろされ、白っぽい御髪の方は、ちょっと苦労されているようで――あっ！……足が引つ掛かって危うく落ちそうになるところを間一髪支えられました。ふう。

……なんて、ちょっとはらはらしながら眺めていたら、荷台の全員が降りたところで今度は助手席から誰か降りてきた。淡い金色の髪が日の光を受けて透けるように煌いている。

「！！！！」

そう、皆さん揃ってようやく気づいたのだ――私のバカー！――が、それは昨日の公子サマご一行だった。

とっさに祥くんを盾にして隠れる私。

次の瞬間、ゾクツと冷たいものを感じた気が……山から北風でも吹いたのでしょうか？

祥くんの腕を見ると、鳥肌が立っているのが見え、やっぱり一瞬だけ冷たい風が吹いたのだと納得。

もう5月だけれど、山に近いこのあたりは朝晩が冷え込むこともあるからですね。うんうん。

「祥くん、寒いなら上着着たら？」

「おまえ……いや、いい。」

見上げると――祥くんはたしか180cmちょっとだったはず――何故か呆れ顔（??）で私のアドバイスを却下した。まだ鳥肌立っているのに大丈夫？

「それより知ってる連中か？」

「知ってるっていうか、昨日フェアに視察に来ていた外国の偉い方達」

……いくら幼なじみのハトコでも、プチ誘拐されて云々っていう

ことは言えませんが——言ったらどんなことになるのか想像できてしまいます。

祥くんはちょっと喧嘩っ早いところがあるし、同い年なのに時々私のことを年下扱いするのだ。慶くん——祥くんのお兄さんの慶けいいちくん、3歳上で同じく幼なじみ——ならまだ分かるのだけど。……ときどき、二人して私のことを伽菜かなちゃん——2歳下のこれまた幼なじみの、慶くんと祥くんの妹——と同じに見ているんじゃないかと思うことがある。

「外国のお偉いさんがさやに何の用だ」

「さあ……」

これは本当に分からないので首を傾げる。

私たちがこそそと話している間に、公子サマご一行がこちらに近づいてきた。

……執事さん、じゃなかった、セパシウスさんはしきりに腕を顔のところに持ってきて匂いを嗅いでいるよう。??どうしたんでしよう？

挙動不審なセパシウスさんを観察していると、またさっきのゾクツとした感覚がした。また北風？祥くんもまたまた鳥肌立てているし、やっぱり上着を着たほうが……と言おうとしたところで

『~~~~~』

「突然お邪魔して申し訳ございません」

気づけば公子サマ（と通訳少年）が目の前に来ていました。

お二人の後ろには、右をクンクン、左をクンクンと今だ挙動不審なセパシウスさん。更に後ろに昨日と同じく「警護の者です」と言わんばかりの雰囲気の方がお二人さま。

そこでようやく、自分がまだ祥くんの後ろに隠れたまま——と言っても顔は覗かせているのだけれど——であることに気づき、慌ててピョンと横に出る。

ううう、おばあちゃんが居たらこっぴどく怒られるところです。

それにしても、目の前にいらっしゃる5名様。揃いも揃ってピシッとスーツにネクタイできめてらっしゃいます。

加えて、いかにもヨーロッパのお城に執事として控えていそうなセパシウスさんといい、貴公子然とした通訳少年といい、淡く煌く金髪に柔らかな笑みを浮かべた‘王子様’にしか見えない美形公子サマといい……

すみません、失礼を承知で感想を言わせていただきますしよう。皆さん、日本の田舎の背景ととってもミスマッチです。

## 14話 翌日自宅にて 3（後書き）

このパートにおいて、主人公がボケボケであっさりスルーしている部分については、そのうち幕間という形で主人公以外の視点を入れて整理するつもりです。

（…って予告して良いものなのでしょうか？）



## 15話 翌日自宅にて 4 (前書き)

「14話 翌日自宅にて 3」に出てくる主人公の幼なじみたちの名前を変更しました。

## 15話 翌日自宅にて 4

わたしの住むこの地域は水田と山に囲まれた本当に田舎——日本の原風景！という感じの——で、その中に立つ見た目からして‘洋物です！’というお三方と‘その筋ですか？’というお二方というのは目立つことこの上ない。

おまけにここいらの家は街中と違って塀で敷地を囲んでいない——家によっては生垣で遮っているところもあるけど少数である——ので、お隣さんとかお向かいさんとかから田んぼを数枚隔てても皆さん丸見えなのである。

後でご近所の女性陣（老若無関係）の推測&噂話に巻き込まれたためには証拠隠滅……じゃなくて来客隠匿（？）したいところなのだけれど、そもそも皆さんがどうして私を訪ねて来たのかさっぱりで。

逸らしていた視線を公子サマの顔に合わせると、ニツコリとスマイルを向けてきました。

う、わ。昨日のオーラ全開の微笑みもすごかったですが、今のこれは……‘甘い’って言うんでしょうか？これぞ‘王子様’、スマイル？（実際は‘公子’サマだけど。）

写真に撮って恭子さんや綾ちゃんたち昨日フェア会場にいらした皆さんに送ったら狂喜乱舞するのではないでしょううか。

「おい、さや、この‘客’、どうするんだ？」

祥くん小突かれて、昨日のフェア会場の皆さんの盛り上がりっぷりに飛んでいた思考が引き戻される。

「どうするって言われても……」

とりあえず、ご用件を確認しなきゃ、ですよね？

公子サマはにこやかな笑顔だし、お付のセパシウスさんと通訳少年を除いては昨日のフェアと同様の警護以外の人は居ないようだし、雰囲気からいって不敬罪で云々ということは無いと思う…というか思いたいです。

「あの…皆さんはどうしてここに？」

思い切って尋ねてみると、セパシウスさんが一步前に進み出て右手を胸に当て言った。

『――――――――――、――――――――――、――――――――――  
――――――――――、――――――――――――――――――――――  
――？』

「前触れ無く突然ご訪問いたし、誠に申し訳ございません。ご多忙のところ恐縮ですが、少しお時間を割いていただいてよろしいでしょうか？」

なんだか恐縮してしまうような‘うやうや恭しき’に、ご丁寧にありがとうございます、と意味も無くお辞儀をしてしまう。

こうなったら外で立ち話というわけにもいかないのだが、さすがに昨日のことがあるので私一人で対応するのも避けたいところ。

というわけで、ツンツンと隣の祥くんの腰のシャツを引っ張る。

「うん？」

「昨日会ったばかりの方たちなんで、一緒に話を聞いてもらいたいのだけど良い？もし何か用事があるんだったら無理にとは言わないけど…」

体を傾けて位置を下げてくれた祥くんの耳に手を当てて、小さな声で立ち会ってもらえないか頼んでみた。

またもやゾクツと感がしたが、三度目なので気にしない。

祥くんはちらっと公子サマご一行に目を向けると、

「しょうがねえな」

と言ってOKしてくれた。

「ありがとう！持つべきものは親切な幼なじみだね！！」

お休みを取って用事を片付けている忙しいはずの祥くんに心から感謝していると

「ここでさや一人放っておいて後でアイツらにバレたら殺されるしな」

と溜息混じりで返された。

あー、そう言う事ですね。納得です。

「俺は先に車に積んでる鶏糞けいふん降ろしとくから、さやは客を案内しとけよ」

そう言って軽トラックに向かう祥くん。

「うん、わかった……って、ええっ！？祥くん、鶏糞積んだ荷台に皆さん乗せてたの！？」

思わず叫んでしまいましたよ。

鶏糞というのはその名のとおり鶏の糞のこと。有機肥料として販売されているものなのだけれど、結構臭いにおがする（ちゃんと袋詰めしてあるのに臭うのは不思議です）。

道理でセパシウスさんがご自分の服をクンクン嗅いでいるわけです。

「しょうがねえだろ。お客たちが乗ってきた車じゃ大きすぎてここまで入ってくるのは無理だったんだよ」

もしかして昨日のあの黒い、後部座席が対面になっている車だったのでしょうか？再度納得です。

自宅の周囲の公道は舗装こそしてあるもののその大部分が車一台分の幅しかなく、すれ違ったりする時には公道に隣接した家の庭先を借りたりしなければならぬ。交差点もやっぱり狭いので、あんな長い車じゃ絶対に曲がれない。

消臭スプレー出してこなきゃいけませんね。  
そう思いながら、公子サマご一行を家へとご案内した。

## 15話 翌日自宅にて 4 (後書き)

田舎の旧道とかはここまで車社会になるなんてことを考えてないので狭いものが多いですよね。

慣れている人は結構スピード出して走りますが、助手席に乗っていて怖いです。

そして公子サマそっちのけで幼なじみとばかり絡んでいる主人公  
…(汗)

## 16話 翌日自宅にて 5

私の家はこの辺りでは一般的な、寄棟造りの平屋建て——古民家とかで紹介されるようなアレです——の母屋に、離れという造り。

母屋の間取りは田の字型を基本としている。字の通り、四つの部屋が田の字に並んでいる構造で、それぞれの部屋は基本的に襖や障子で仕切られている——襖や障子を外してしまえば、真ん中に柱が一本立った大きな空間として使える仕組みだ。

我が家の場合はずっと四部屋すべて和室だったが、うち一室——田の字の左上——をフローリングに改装した。足が悪くなってきたおばあちゃんの寝室として椅子やベッドを置くために。

田の字の右上の部屋の右に台所、右下の部屋の隣は広い土間を備えた——昔は雨天の時にここで作業を行っていた——玄関となっている。

田の字の下二部屋のさらに下に縁側があり、縁側の左端に洗面所とトイレ、右端にお風呂場がある。ちなみにお風呂場は、リフォーム前は五右衛門風呂——大きな金属の釜で、入浴の際は足を火傷しないよう板を足の下に沈めて入るもの。この板を足で沈めるのが意外とコツがいる——で、ご存じの通り今は庭で日向さんの住処として第二の釜生（？）を送っている。

台所と玄関の右側に、昔は竈の間、食器や食料品の納戸（土間）、農機具などの物置という三つの部屋があったのだが、これを竈を残した納戸と、土足のまま入れる通称‘談話室’の二部屋に改装した。竈を残したのは、お餅つきの際にもち米を蒸したりするのに使うため。

談話室は外から直接入れるようになっていて、中には地元の干ばつ材を使った大きめのテーブルやベンチ等をおいてあり、お客さんにちよつと座ってもらったり、作業ができるようになっていて。奥の扉は台所に通じているので、お茶を持ってくるのに便利である。

私が公子サマご一行を案内するのはこの談話室。

正式な客間はもちろん和室のほうなのだけれど、さすがに昨日の今日でまた足を痺れさせてしまうわけにはいきませんしね。

「こちらへどうぞ」

談話室入り口の引き戸を開けて右手で支えたまま、左手で中を指す。

先頭の公子サマが私ににっこり微笑みかけながら中へ入ろうと――。

あ、そういえば

「あの、頭上、注意――」

ゴツッ！

入り口の鴨居に盛大に頭をぶつけてしまい、頭を抱えてしゃがみこむ公子サマ。

「……してください」

あああ、間に合いませんでした。ごめんなさい――！

自分が全く問題ないので忘れがちなものだけれど、最初に建てたのが百年近く前で皆さん小柄だったのだろう、鴨居の位置はそんなに高くなかったりする。くぐってしまったえば天井はもっと高いのだけだ。





まっって何とも言えない色っぱさ——艶っって言うんでしょか？——を醸しているようなないような……。

なんででしょう？胸がざわつくようなこの……

……

……

……

……はあー。いくら美形だからって、男性にこんなに女子力で負けてるってどうなんでしょう、自分。

平々凡々な容姿と性格は自覚してますけど、こんなふうに突きつけられるとどうしてもヘコミますよね？

思わずガツクリと項<sup>うなだ</sup>垂れてしまう。

「おい、何やってんだ？」

祥くんが鶏糞を運び終えて来たようです。

「…私が注意するのが遅れて、頭をぶつけちゃったの」

「…さやが手を挟んだとかじゃなくてか？」

祥くんの視線の先を見れば、私の右手が公子サマの両手に握られている。……いつの間に？

「す、すみません!!」

慌てて引き抜くと

チッ！

えっと、今のもしかして舌打ち……???

立ち上がった公子サマを見上げれば、やはり変わらない、王子様、スマイル。

……空耳でしょう。

とりあえず、ぶつけたところは大丈夫そうなので、またぶつけたりしないよう注意してもらって皆さんに談話室に入ってもらった。



## 16話 翌日自宅にて 5 (後書き)

主人公の自宅については、作者の親戚の家がモデルです。

余談ですが、短編「忘れないで…」を投稿してますので、興味があればこちらも読んでみてください。

## 17話 翌日自宅にて 6

談話室に入っすぐ右手にはドアがあつて、中はトイレ（主に來客用）になっている。談話室の中心には、入り口から見て縦方向にテーブル（間伐材で作った大きめのサイズ）と、その周囲に丸太椅子が8個ほどおいてあり、右手の窓側と奥の壁際にベンチ（板をめくると物入れ）が作り付けてある。奥の扉は納戸に続き、更に台所へと通じている。納戸への扉の手前の左側壁際に腰くらいの高さの棚を置き、その中にコップや茶葉、インスタントコーヒーをしまつていて、棚の上のポットのお湯で入れて自由に飲めるようにしている。

窓側の椅子に、公子サマを真ん中に、向かつて右側に通訳少年、左側にセパシウスさんと座り、護衛の二人は外に通じる扉の近くと公子サマたちの後ろにそれぞれ立っている。護衛さんたちにも椅子を進めたのだが、「これが自分たちの仕事です」と断られた。……‘逃走防止’とか‘取り調べ’とかいう言葉が浮かぶのは私だけでしようか？

公子サマたちのお向かい、真ん中に私が、祥くんが私の右側に座り、テーブルの各人の前にコーヒ<sup>っ</sup>ーを注いだカップを置いて、一応話をする格好が整った。

まあ、全員がこの位置に落ち着くまでにちよつとバタバタしたのだけだ。

冷凍庫に入れてあったアイスノンを公子サマにお持ちしたり――鴨居にぶつけたトコロにあてた方が良いと思ったのだけれど何故か断られた――とか。

消臭スプレーを持ってきてセパシウスさんに使い方を説明しながら差し出して泣きそうな顔をされたり——いえいえ、けしてセパシウスさんが臭うってわけじゃありませんから！——とか。

コーヒーもさすがにインスタントコーヒーは失礼だろうと思い、ほこりを被っていたコーヒーメーカーを引っ張り出して、他人<sup>ひと</sup>から頂いて棚の奥にしまっていた挽いた豆から淹れたり——流石にインスタントより良い香りがしますね——とか。

ともあれ、こうしてテーブルに五人が座ったわけですが。

……これからどうしましょう？

いきなり「何の御用でしょうか」と聞くのも切り口上のような気がしてどうしたものかと悩む私に

『————————————————————————————————』  
『————————————————————————————————』

「事前のアポイントも入れず突然おしかけまして、誠に申し訳ございません」

そう言って頭を下げたのはセパシウスさん。

「おしかけるなんて：他に用事ありませんでしたし」

そちらから話の口火を切ってくれてホッとしています。

『————————————————————————————————』  
『————————————————————————————————』  
『————————————————————————————————』

「昨日申し上げましたが、再度ご紹介いたします。こちらのお方はクロウシェン公国の第三公子、クラウス・シエルツェン・フォン・クロウシェン様です」

もちろん、セパシウスさんが示したのは真ん中に座っている公子サマ。私の真正面に座っていらっしゃるので、しっかりお顔が観察

——いえいえ、拝見できます。

細筆で引いたような眉に翡翠を嵌め込んだような瞳だとか、すつと通った鼻筋に厚すぎず薄すぎずの唇だとか、パーツがほぼ左右対称の顔に絶妙のバランスではまっている。窓からの光を受けて淡く輝く金の髪は柔らかい波を描いて額や耳にかかり、後ろだけ少し長くてシャツの襟の下くらい。

白馬に乗った王子様か背中に翼の生えた天使様かっというくらいの美形サマです。

目が合うたびにオーラ全開で微笑まれると、一般庶民の私には眩しすぎて目の毒なんですが……。

『——————————』

「お歳は28歳、独身です」

そうなんですか。でも今時二十代で独身って珍しくないですよね。

『——————————』

「恋人も婚約者もいらっしやいません」

……………

……………

……………そういうのがそちらのお国の自己紹介なんでしょうか？？

## 17話 翌日自宅にて 6 (後書き)

あけましておめでとうございます。

そして、更新が遅れまして申し訳ありません。

年末行事が立て込んだのと、またもや風邪をひいてしまったのと（いくら☆☆は風邪ひかないとは言え、ワンシーズンに何度もひいたら☆☆だろう自分：orz）、ネット環境の無い所へ帰省していたのと……なんかもう、本当にすみませんでした（平身低頭）。

年も明け、また週一程度の更新で頑張っていきたいと思います。  
どうぞよろしく御願いたします。



## 18話 翌日自宅にて 7 (前書き)

公子サマたちの国は架空のものです。

人名についても、完全にフィーリングで付けています。

異なる国の人名が混じっていたり、実在しない名の可能性大ですが、つつこみはお心の内に留めていただけるとありがたいです。

## 18話 翌日自宅にて 7

学生時代に海外にホームステイしたことがあったはずの祥くんはどう思ったのかな？

そう思ってたのかもしれない。向こうも横目でこちらを見ていた。口元が何か言いたげにひくりと動いた気がしたけれど、結局発言は無かった。

……やっぱり珍しいんでしょうか？あの紹介。まあ、お国が違えば風習も違うということだ。

『――――』

「この者はユーリ・リョウト・ブラント」

次にセパシウスさんが示したのは公子サマの右隣に座る通訳少年。

『――――』

「祖父が日本人で、日常会話程度の日本語であれば不自由なく話せます」

いわゆる‘クォーター’ということですね。

黒髪黒目だ――目が一重なのは特に日本人らしい？――けど、やや彫りが深い顔立ちとか白い肌とかは残り四分の三の血の賜物なのだろうと納得。

まっすぐな髪を肩くらいまで伸ばして首の後ろで一つに括った髪型は日本の子供ではあまり見ないものだけれど彼には似合っているし、着ている黒いスーツ――襟元に結んでいるのは普通のネクタイじゃなくて紺の紐をリボン結びにしたものだから制服にも見えるかな？――とも相まって小さな執事さんにも見える。

『――――』

――

「まだ12歳と若輩ですが、将来に備えて経験を積ませるため同行させました」

はあ。

12歳でもう将来のことが決まっているんですか。

「感心ですね」

思わず声が漏れてしまいました。

通訳少年あらためユーリくんは

「まだまだ至らぬところばかりです。この度は殿下のおかげで祖父の故国を直接この目にする機会を得ることができました。まだまだ未熟ですが、殿下のお役に立てるよう精一杯勤める所存です。僕の日本語のおかしな点がありましたらどうぞ指摘ください」

……それだけ喋れば完璧だと思います。ええ、本当に。

――

――

――

「私はセパシウス・カルツェスタ・デラントと申します。クラウドス殿下の身の回りのお世話をさせていただきます。どうぞお見知りおきください。」

続いてはセパシウスさんご本人。右手をお胸に当てて軽く目礼。

昨日のフェア会場と同様の執事服（もどき？）を着用され、ぴっちりとなでつけた白に近い灰色の髪と整えた髭に柔和な笑み。

昨晚涙を氾濫させていらっしゃったお姿が嘘のようです。

ついまじまじと見てしまい

『――？』

「私の顔に何か付いてますでしょうか？」

怪訝な顔をされてしまったので、「何でもありません」と慌てて顔を背けました。…少し不自然だったかもしれません。

あ、ちなみにセパシウスさんの目は髪より濃い灰色でした。

最後は立ってらっしゃる黒服の方たち。

[illegible]

「この両名は護衛です。日本の治安のよさは承知しておりますが、立場に伴わないわけにゆきませんもので。お目ざわりでしょうがご容赦ください」

護衛の方たちは背も高いし体つきもゴツイ感じで威圧感があるのだけれど、護衛というお役目柄仕方ないのかもしれない。

いや、むしろそれらが護衛としての必須条件なのかも！

そう思うと怖いというより、おつかれさまです、大変ですね、と思えてきて、お二人に会釈しました。

こうしてお客様たちの紹介が終わったところで、次はやっぱりこちら側ですよ、どう考えても。

というわけで

「ご丁寧なごあいさつ、ありがとうございます。昨日は名乗りもせず失礼いたしました。佐原清香と申します」

実際は無理やり車に連れ込まれたり、問答無用で抱きつかれたり  
 なんだったりで名乗るどころじゃなかったわけなのだけども……  
 そこは触れずにとというのが大人の対応というものです。

というわけで、にっこりと日本人らしい微笑と共に名乗ったので  
すが。

じー。

テーブルの向こうの皆様の視線が、こう……

護衛の皆様まで含めて5名分の視線が妙な重さを伴って私に集中していたりする。

えーっと、これはやっぱり名前だけじゃ駄目ってことでしょうか？

……十代の時は全く感じなかったのに、二十代、それも23になったあたりから年齢を口にするのがなんだか気恥ずかしく——異性相手だと特に！——なってきたのは不思議ですよ？ふふふ。

言わずに済めばと思っていたのですが、どうやらそうもいかないようですので言いました。

「……24歳です」

しかし視線はまだまだ許してくれません。

じー————

いえ、むしろ先ほどよりプレッシャーが強く……？  
アレですか？アレを私も言えと仰るのですか！？

救いを求めて祥くんに視線を向けましたが

「……言うしかねえんじゃないか？」

むしろトドメを刺されました。

じー————

それでも観念しない私に、無言で視線だけが迫ってきます。

じー————

……内向的な日本人にはこの視線集中ってつらいですよ？

じー————

じー————

じー————

「……………独身、恋人もいませんし結婚予定もありません…………」  
結局屈しました。

ううう、捨ててはいけない何かを捨ててしまったような気がします。

## 18話 翌日自宅にて 7 (後書き)

少し長めでしたが読んでくださってありがとうございます。

次かその次くらいで公子サマたちの訪ねてきた用件が出てくる…  
はず…です。

たぶん……………。

## 19話 翌日自宅にて 8

いやいや、‘恋人がいない’って言っただけですし！

彼氏いない歴〓年齢って言ったわけじゃないですし！！

世の中には私と同じ年齢で、私みたいに平々凡々で、‘今’恋人  
がいない女性だっていっぱいいる！

……はず！

………ですよね？

………うん。

自分の言葉で地味に受けたダメージを振り払い、気を取り直して  
お客人方を見れば、いつの間にやら皆さんの視線は隣の祥くんへ。

「次は俺かよ！？」という感じに苦笑していたけれど、この状況  
で一人言わないというのは許されないでしょう。

しかし、さすがは祥くん。  
（とじましようじ）

「豊嶋祥二。24歳、独身、彼女持ち。結婚は……まあ、そのうち  
に」

とあっさり言った。

やっぱり男性のほうが、自分の年齢とか言うことに抵抗が少ない  
んでしょかね？……恋人については‘いる’方が‘いない’より  
言いやすいんでしょうけど。

しかし、何故にそこで続けて

「あ、念のため言っとくけど、俺の‘彼女’ってこいつじゃないか  
ら」

なんて言う必要があるのかわかりませんよ、祥くん？

蛇足とは思えない言葉の必要性を祥くんに訊こうとしたけれど、



『――――、――――？』

「失礼ですが、豊嶋様と佐原様とのご関係は？」

セパシウスさんが尋ねてきてできなかった。

「あ、彼は私の親戚――はとこです。はとこというのは、親同士がいとこなんですけど……解りますか？」

『――、――――』

「はい、わかります」

「確か曾祖父の代だったと思いますが、本家――彼の家から分かれてこの家を構えたんです。今も親戚づきあいをしています」

『――――』

「なるほど」

大きく頷くセパシウスさん。

「私一人で皆さんとお話するのは心細かったので、一緒に立ち会ってもらうように頼んだんですが、構わないでしょうか？」

私がそう尋ねると、公子サマと一言二言言葉を交わし

『――――』

「佐原様のご親戚ということでしたら構わないでしょう」

と祥くんの立会いを認めてくれた。

もし認めてもらえなかったらどうしようと心配だったのでホッとしましたが、続けて

『――、――――』

――――？』

「但し、これからお話しすることは非常にデリケートな内容です。ご他言無用ということをお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

と言われて、改めて緊張に襲われる。

公子サマご一行の‘デリケートな内容’って何でしょう？見当もつきません。

………というか、そもそもそんな内容私たちが聞いちゃって構わ

ないんでしょうか？

「わかった」

と先に頷いたのは祥くん。

「但し、話の内容によつては俺の家族には伝えることになるかもしれない。さやの身内として皆気にかけてるんで。

「それに、お偉いさんの‘デリケートな話’、つてのが何かはしらないが、身内としてこいつが危険なことに巻き込まれるようなのはお断りだ」

おお、すごい。祥くんが慶くんみたいにピシッと話してますよ！  
いつものイメージはどこへやら、頼もしく見えます。  
思わずぽかんと見てしまいました。

「……さや、お前、今何気に失礼なこと考えただろ？」

「うん、慶くんちゃんと血が繋がってたんだねえ」  
しみじみ。

何度も頷く私に、「おまえなあ」と口元を引き攣らせる祥くん。  
いやいや、だってしょうがないでしょう？ お兄さんの慶くんはいかにも長男らしく落ち着いていて‘理知的’なのに対し、祥くんは‘乱暴・粗忽’なんですから。

こっちでそんな話をしている間に、向こうも話が済んだよう。

セパシウスさんは何やら渋っていたようだったけれど

『~~~~~』  
~~~~~

「お身内として心配されるお気持ちはもつともです。どうぞ一緒に話をお聞きください」

結局、公子サマの言葉で決着がついたようだった。

## 19話 翌日自宅にて 8 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

前回の後書きで今回か次回に用件を…と書きましたが、やっぱり  
どうか今回届きませんでした。

祥二が意外と行数を占めまして……

(いやいや、キャラのせいにしてはいけません)

次回のラストでちょっと触れて、メインはその次となると思いま  
す。

引き続きお付き合いいただければ幸いです。

## 20話 翌日自宅にて 9

さあ、いよいよ本題ですよ！

と思ったのですが、

『――――――、――――――――――  
――？』

「誠に恐れ入りますが、このお部屋の防音はどれくらいのものでしようか？」

とセパシウスさん。……引っ張ります。

「防音……ですか？」

『――』

「はい」

うーん。改築したときにある程度の‘おしゃべり’は想定して、外に音が響きにくくなるようにはしたけれど、音楽室ほどきちんとした防音処置はしていない。

そう答えると、セパシウスさんはちょっと考え込む素振りを見せた。

『~~~~~，~~~~~？』

そんなセパシウスさんに、公子サマが変わらずもの柔らかな口調で何事か言う。

わかりましたという感じで公子サマに頷くと、今度は私に向かって談話室から外へ行く構造について尋ねてきた。

談話室から外へでる場合は3通り。

一つは今私たちが入ってきた外へ直接繋がっている扉。

次に竈の間への扉を出て、竈の間から外へ出る勝手口。<sup>かまど</sup>

最後は変則的だけれど、竈の間から台所を通して玄関。……最後

のルートはあまり使わないけれど。

他にも無理矢理探そうとすれば、縁側からとか窓からとかいろいろあるだろうけれど……そこまで訊いてませんよね？

私の説明を聞くと、護衛の人たちに何か伝えるセパシウスさん。護衛さんたちは頷くと、談話室の二つの扉にそれぞれ向かっていく。

どうするのかわかったら、

『――――――，――――――，――――――，――――――』

「無いとは思いますが、私どもの話を聞かれないよう、表を見張らせます」と説明してくれるセパシウスさん。

えーっと……

「ただ一人に聞かれちゃマズい話を聞かせる気なんだよ」  
ボソリと呟く祥くん。

……ですよねえ。

『~~~~~，~~~~~』

「大袈裟で申し訳ありません」

祥くんの言葉が分かったかのように、申し訳なさそうな笑みで謝る公子サマ。

『――――――，――――――，――――――，――――――』

「用心はし過ぎるに越したことはございません」  
反駁するセパシウスさん。

だから、そこまで用心が必要な内容を私たちが聞いても良いのでしょうか？？

どんな話を聞かされるのか考えると顔がひきつりそうな気が……。と、そこへ。

ガラリ。

表への引き戸が開けられる音が耳に飛び込んできた。  
右を見ると護衛さんの一人が表に出ていくのが目に入る。  
『そう言えばさっき、表を見張らせる』って……

ワンワンワンワンワンワンワンワンワン！

次の瞬間、庭に響く犬——ムウくんの吠え声。

あゝ、やっちゃいました！

うちのワンコたちのうち、シイさんはあまり吠えない。おとなしいというわけではなくて、吠えずにいきなりガブリといくタイプ。

…これはこれで危ないけれど。

吠えるのはムウくんの方。家の敷地に知らない人が入ってくると吠える。私が一緒だと吠えないのだけど、今回護衛さんが一人で出ていったものだから、警戒対象にされちゃったよう。

ワンワンワンワンワン！

ウワンウワンウワンウワンウワン！！

あわわ、さらにボリュームが上がりました。このままじゃ近所さんが何事かと駆けつけてくるかもしれません。

「す、すみません。止めてきます！」

私は慌てて立ち上がり、外に飛び出た。

## 20話 翌日自宅にて 9 (後書き)

お待ちの方、先週投稿できずに申し訳ございませんでした。

休日出勤が思ったより長引き、帰宅後に感想へのお返事を一つ書いてただけで精魂尽きまして…。

翌日からはずっとお客さんの視察に張り付いて、早出の遅帰り…

…気力体力持ちませんでした。orz

なんとか日曜に投稿しようと思ったのですが、やはり間に合わず日が変わってしまい……orz×2

ただ、長くなったので2話に分けての連続投稿といたします。

## 21話 翌日自宅にて 10

庭の奥で勇ましく四肢を踏ん張り、扉の脇に立っている護衛さんに向かって吠えたてているムウくん。

その脇には同じように立ってじっとこっちを見ているシィさん。

ギャンギャンギャンギャン！！

ムウくんの吠え声は今や最高レベル。

早く止めないと！

「すみません、ちょっと手をお借りします！！」

ぎよっとする護衛さんの右手を自分の右手で握って大きく上下に振る。

「ほくらムウくん、握手だよ、あくくしゅ。この人はお客さんだからね」

ムウくんに見せつけるため、通常の握手より大きく上下にぶんぶん振る。

ウゥ、ワンワン、ワンワンワン！

警戒レベルは下がったものの、まだ吠えているムウくん。

……うう…握手で治まって欲しかった……。

次はちよっと恥ずかしいんですけど……。仕方ありません。ちよっと自己暗示、自己暗示。

この人は護衛の人、お巡りさんやお医者さんと一緒、その道のプロの方、恥ずかしがることは無いのです、無いのです……。よしっ！！



「またまたすみませんっ、ちょっと腕をお借りします!!」

握手したままの護衛さんの右手の先――腕に、自分の左腕を回す。いわゆる腕を組んだ形です。

とっさに振りほどこうとする相手の腕の動きを、自分の腕に力を込めて押さえつける。体を腕に押しつける形になってしまったけれど、ここで振りほどかれてしまったては元の木阿弥、ムウくんの警戒レベルが上がってしまう。

「ほおくらムウくん、腕組んで仲良しさんだよ。お友達だから吠えちゃダメだよ」

顔はムウくんに向けて笑顔。左腕はしっかり相手の腕を捉え、右手の握手をほどいてムウくんに仲良しぶりをアピール。

ウーーーー、ウーーーー。

吠え声はおさまったものの、今度は唸るムウくん。

この状態で私が中に入ると、また吠え出すかもしれません。

これだけはやりたくなかったのですが……。

「本当に、ほんとうに、すみません! ちょっと頭を下げてもらっても良いでしょうか?」

右手を護衛さん――この方もずいぶん背が高いです――に向けてチョイチョイと振ると、訳が分からないでしょうに腰を屈めてくれた。

良い人です。

手が届くようになった相手の頭に右手を乗せて撫でる。

いわゆる‘イイコイイコ’です。

「ムウくん、ムウくん、ほらほらイイコイイコ。ムウくんと同じイイコだよ。ムウくんイイコだから、もう吠えないよね」

イイコイイコ。イイコイイコ。

……なんだか護衛さんが硬直している感じがします。

ひくん、ほとんど見ず知らずの相手に‘イイコイイコ’されるな

んて硬直して当然ですよ？ごめんなさい、ほんつとうに、ごめんなさい！！

ここでムウくんから視線を外すわけにはいかないので、心の中で謝り倒します。

ようやく、ムウくんが警戒を解きました。控えめながら尻尾を振ってくれているのがその証拠です。

それを見てホッと一安心。

これで護衛さんを一人にしても大丈夫なはずです。

ムウくんがまた警戒モードに入らないようゆっくり護衛さんから離れて、深々と頭を下げました。

「いろいろと失礼なことをしてすみませんでした」

私の声に、硬直していた護衛さんも我に返ったのか直立の姿勢に戻る。

ムウくんの警戒を解くためとはいえ自分より年上の方に‘イイコイイコ’なんてやってしまった恥ずかしさで顔が上げられず、そのまま逃げるように（実際逃げたんですが）談話室に戻った。

あゝ、顔が赤くなってるかもしれません。

「お客様をほったらかしにして申し訳ございませんでした。あんまりうちの犬が吠えると、ご近所の方がなにか有ったんじゃないかと警察呼んだりするかもしれないもので……」

言い訳をしながら席に戻る。

：あれ？なんだか皆さん——王子様スマイルの公子サマ以外の皆さん——顔色が少し悪くありませんか？

「あの……」

「さや、頼むからもうちょっと時と場合を考えような？」

何かあったのか聞こうとする私を遮るようにそう言った祥くん。

考えてますよ？だからムウくんがこれ以上吠えないように止めにいったんじゃないですか。

なのにどうしてそんなことを言われるのか、首を傾げる私に、

「いや、いい…。分かれと言う俺が無理を言った……」

祥くんは、ぐったり？という口調で溜め息混じりにそう言った。

?? さっぱり訳が分からないんですけど???

ウオッホン!

『—————?』

「本題に入らせていただいてよろしいでしょうか？」

咳払いとともに話を引き戻したのはやはりセパシウスさん。

「あ、はい。よろしく願います」

思わず背筋を伸ばして頭を下げてしまいます。

『—————!』

「佐原様」

「はいっ!」

セパシウスさんの呼びかけのあまりの迫力に、学校の授業で先生に指名された時以上の緊張が走る。

『—————!』

「どうか我が国をお救いくださいませ」

「はぁ!？」

「……は、え? え?」

セパシウスさんの口から——実際はユーリくんの口からだけど——飛び出した言葉に、先に反応したのは祥くんの方でした。

## 21話 翌日自宅にて 10（後書き）

お気に入り登録が250件も!?

あ、あ、ありがとうございますっ!!

遅筆で申し訳ございませんがこれからも頑張ります！（低頭）

次でようやく公子サマの事情が出てきます（……ハズです）。

が、期待されると読後に石を投げたくなると思いますので、あまり期待されないほうがよろしいかと……気弱ですみません。

## 22話 翌日自宅にて 11（前書き）

たいへん遅くなりました。申し訳ございません。

何度も繰り返しますが、公子の国は架空の国です。

人名、設定は実在のものを参考にしており、ところもありますが、かなり適当ですのでリアリティの追求はご容赦願います。

## 22話 翌日自宅にて 11

‘我が国をお救いください’

・・・ファンタジー映画か小説くらいでしかお目にかからない言葉に唾然とする私と祥くん。

そんな私たちを尻目に、滔々と話し出したセパシウスさん。

『……………』

「そもそも、わが国の起源に遡れば、1685年にオスマン帝国との戦場より戻ったアダム・クロイス・クロウシェンが没落していたディアラウス伯爵領を購入、その2年後に隣接するドゥーバッハ男爵領及びシャネンス男爵領を購入し……

「……年に時の神聖ローマ皇帝により、購入した土地をクロウシェン公領とすることが認められました。これが我がクロウシェンの始まりとされており……

「……年に神聖ローマ帝国の崩壊により、クロウシェンは独立国となり……」

ふわぁ、スゴいです。

私は只今心の底から感心しています。

何がスゴいかと言うと、開始から10分近くクロウシェン公国の歴史を熱く語るセパシウスさんもさることながら、そのセパシウスさんに一拍遅れるだけで淀みなく訳し続けるユーリくん。

これは先程までの逐次通訳——人が話した後に、その内容を訳す——ではなくて、同時通訳——人が話すのとほぼ同時に訳す——というものでしょう。

私も以前興味があつて通訳養成講座というものを受講してみたのだけれど、通訳というのはただ単に外国語が話せるとか聞き取れるとかだけでは無理なのである。通訳としての特別な訓練——例えば聞きながら話す、というような——が必要だったりする。

これがまたやってみると、普段使わない脳領域を使うような、頭がうにやうにやる感覚がするのです。：私はそうでした。

それを、ユーリくんのような幼さでここまで流暢に話すということとは、内容をもう丸ごと記憶しているに違いありません。

そして、セパシウスさんの語る口調のこれまた熱く滑らかなことときたら。

ちらりと公子サマを見ても変わらずにっこり微笑まれるだけで、特に驚いたり慌てたりした様子もありません。

……やっぱりしょっちゅうあんな感じで語ってらっしゃるってことですよね…？

ふあゝゝ

ただただ感心するしかありません。

「：すげえな」

祥くんの口からも感嘆の呟きが出ました。

さすがに祥くんも感心するんですね、と思ったのだけど。

「爺さんの口調があれだけ熱いのに通訳の子供は全く淡々と話している対比がすげえ」

ええっ！？祥くんの感心するところそっちなの…？

「もう15分近く喋り続けてて息切れも起こしてねえし、どんだけ肺活量あるんだ？」

そっか、祥くんはそういうところが気になるんですね。まあ、らしいと言えば祥くんらしいんでしょうか。自分が肉体労働派なの

で、他人様の身体能力とかが気になるんですね。

祥くんの感心ポイントに感心していると、

「…が、現在のクロウシェン公国の君主にして摂政、第16代公爵閣下でございます」

セパシウスさんによる、クロウシェン公国の歴史、講義が終わったよう。

大きく一つ息をつくセパシウスさんに、思わずパチパチと拍手をしてしまう私。あ、もちろんユーリくんにも拍手です。

『――――』

「恐縮です」

私の拍手に、ちょっと照れたような表情のセパシウスさん。おっと、ユーリくんもちよつと頬のあたりが薄紅色になっているかも。

表情は変わっていないけれど、もしかしたら照れているのでしょうか？

微笑ましくてニツコリとして見ていたら、

「おい、さや。ところでおまえ、爺さんの説明ちゃんと聞いてたか？」

祥くんがこっそり耳元に聞いてきました。

うゝ

……いえね、歴史って物語としてはおもしろいんですけど、年号が入ってくると……数字覚えるのが苦手だったりするのです。

なので、

「大まかな粗筋程度は…」

いえいえ、決して感心するのに忙しくて聞いてなかったということではないですよ？

ええ、ホントに。



のどを潤すように、すっかり冷めてしまったコーヒーを飲むセパシウスさんとユーリくん。

こんなことならお水を用意しておくべきだったでしょうか？

コーヒーを一気に飲み干すと、セパシウスさんはカチャリとカップをソーサーに置き、ウォッシュホンと咳払いを一つ。只でさえ真っ直ぐ伸びている背をさらにしゃキンと伸ばし姿勢を整えると、右手で公子サマを指し示し、

『――――――――――，――――――――――』

「そして、こちらのクラウド殿下が第一位爵位継承権、つまり次代の公国君主であらせられます」  
重々しく宣言した。

## 22話 翌日自宅にて 11（後書き）

ずいぶんと間が開いてしまい、誠に申し訳ございませんでした。  
リアルの山場は越えたはずでしたが、たて続いた慌しさに体がへばってしまったようで……。

なんとか回復しましたので、また週一くらいで更新できると思います。

祥二くんが感心している‘話し続けているのに息切れを起こしていない’について。

一応ちゃんと息継ぎはしてます。が、ほとんど切れ目を感じさせずに喋り続けているので感心しているのです。

余談ですが、作者の短編に関する削除したエピソードや後日談、裏設定など、短編を立てるほどではない話を、‘莎月の短編こぼれ話’という形で出していききたいと思います。

2月21日1時で予約投稿しています。よろしかったら覗いてやってください。

## 23話 翌日自宅にて 12

じだいのこうこくんしゅ。

時代の広告くん・しゅ。

次代の子……いやいやいや、ちがいます、ちがいます。

聞き慣れない言葉に脳内変換が変な方向に進みそうになりましたが、がんばって引き戻します。

「くんしゅ…」

要点はここですよね？

「じゃあ、そちらの公子サマが次の国王サマってわけか？」

祥くんが確認するように言葉を変えて聞いていく。

今日の祥くんは本当にすごいです。いつもの大雑把さはどこへ行ったのでしょうか！？」

『————————————————————————————————』

「我が国は‘王国’ではないので君主は‘国王’ではありません。あくまで身分は‘公爵’であり役職は‘摂政’となります」

うーん？？？

貴族階級の無い日本人としては今一つよく分かりません。

これは祥くんも同じのよう。

思わず首を傾げてしまうけれど、見ればセパシウスさんも困った顔でちよつと首を傾げている。

私たちがどうしてよく分からないかが分からない……なのでしょう  
か？

……

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

.....

えつと。

このままお互い首を傾げて見つめ合っても変なので。

「すみません、一つ質問よろしいでしょうか」

学校の授業の質問のようにそろりと挙手する私。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

「どうぞ、佐原様」

鷹揚に頷くセパシウスさん。あ、首の角度が戻りました。

「第三、公子様なのに、第一、位爵位継承権をお持ちなんです  
か？」

とっさに思いついた疑問を口にする。

[illegible]

---

「我が国では男女を問わずに出生順に第一、第二とお呼びしており、クラウス殿下の上のお二方は公女殿下でいらっしゃるんですよ」

へえ。

「じゃあ、公子様は末っ子なんですか？」

日本で末っ子というと甘えん坊なイメージがあるけれど、目の前の公子サマは顔こそ甘い王子系だけれど態度は落ち着いていて、し、浮ついた雰囲気も無い。

[illegible]

「いえ、下に公女殿下がお一人、公子殿下がお二人いらっしゃいます」

えーと、どういふのは……。

「6人兄弟姉妹ってことか」

弦く祥くん。

今時の6人きょうだいって、珍しいですよ。

何か特殊な事情でもあるのかと公子サマを見ると、

『~~~~~』

「私が生まれた後、父が、女性の比率が高くてずるい、と言って男の子を欲しがったのです」

『~~~~~』

「私の次が更に妹だったので、もっと差が開いてしまい、結局1対1になるよう頑張った結果、6人きょうだいになってしまいました」  
にっこりと笑いながら説明してくださいました。

なんだか微笑ましいお話ですね。

思わずにっこり。

6人：というのは無理だと思いますけど、やっぱり男の子と女の子一人ずつは欲しいですよ。

……なんて思っていると、

「しかし6人もだなんて、公子サマのおふくろさんも大変だな。うちなんか兄貴と俺と伽菜かなの3人でてんてこ舞いだったって、いまだにおふくろが言うからなあ」

なんて変な感心をする祥くん。

それは、祥くんのヤンチャぶりが手に負えなかったからだと思えますよ？

順子お婆さんの苦勞が忍ばれます。

思わず、はあ、と溜め息をつきそうになったけれど、

『~~~~~』

「きょうだいが多いのは良いものですよ、にぎやかで寂しい思いをする暇もありませんでしたし」

[illegible]

「それに、子供は神様からの贈り物であると同時に、愛しい伴侶との愛の結晶です。私もたくさん子供が欲しいと思うのですが……」

ハア、と公子サマが先に切なげな溜め息をつきました。

うわ、うわ、うわあゝ。

長い睫毛を伏せて憂い顔の公子サマがやけに色っぽいんですけど！  
どうでしょう？伏せた視線がチラリと上目使いでこちらを見ら  
れたりすると何だかドキドキしてしまうんですけど！

そんじよそこらでは——いえいえテレビの中でも滅多にお目にか  
 かない美貌の麗人の艶姿（？）です！！

ああ、この姿を恭子さんや綾ちゃんに見せてあげたい！！！！

## 23話 翌日自宅にて 12（後書き）

ようやく本筋に戻ってきた気が……。

そして清香ちゃんにはお色気通じてません。

鑑賞物止まり……？

読んでいただいている皆様、ありがとうございます。

じりじりとしか進まなくて恐縮ですが、頑張りますのでお付き合い合  
いいただけると嬉しいです。

## 24話 翌日自宅にて 13 (前書き)

今更ですが、念のために

『~~~~』は公子サマたちの母国語

『一一一』は英語

となっています。(語学力が無いもので…すみません。)



## 24話 翌日自宅にて 13

ここでデジカメなんて持って来て「写真撮らせてください」なんて言ったら、やっぱりヒンシュクのですよねえ……なんて考えていたら。

「……あんた、独身で、恋人も婚約者もないんじゃないかなかったのか？」

ぼそりと呟く祥くん——って、呟くというには声が大きい気が？  
ちらりと見ると……なんだかちよつと不機嫌？

……っていうか、公子サマを、あんた、呼ばわりして良いんでしょうか？

……いやいや、公子サマに限らず、初対面の相手を、あんた、と呼んじゃいけないでしょう。

軽くお祖母ちゃんのお説教30分コースものですよね、これは。

『~~~~~』

「ええ、そのとおりです」

祥くんの失礼な言い方も気にせず——それともユーリくんがそこまで細かく訳してないだけ？——微笑をたもったまま頷く公子サマ。

「具体的な相手もないのに家族設計か？気が早すぎるんじゃないの？」

途端に呆れた声になる祥くん。

そんな祥くんに、苦笑しながら

『~~~~~』

「貴方はそう感じるかもしれませんが、我が家の事情を踏まえると、考えざるをえないのですよ」

きちんと答えてくれる公子サマ。

……なんかこう、物腰は穏やかだし、祥くんの失礼な態度も気にしないでくれるし……良い方ですよ、公子サマって。

「事情?……もしかしてそれが、さっきそちの人が言っていた、国を救ってくれ、ってのに関係があるのか?」

あ、もしかして今の祥くんの質問で本題に戻ってきたのでしょうか？

「国を救う」という表現は彼が大げさに言っただけなのですが……」

公子サマがチラリとセパシウスさんを見ると、

\_\_\_\_\_ !

「大げさではございません」

大声で反論するセパシウスさん。

$$\left. \begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right\} \quad \left. \begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right\}$$

公子サマが更に何か言おうとしますが、

[illegible]

~~~~~! !~~~~~

[illegible][illegible]

あらら…公子サマとセパシウスさんの間で口論？になってしまいました。

ユーリくんは通訳しようとしてくれたみたいですが、お二人の会話が早すぎて無理みたいです。さすがのユーリくんも困った顔をしています…と言ってもちよつとだけ、なのがまた…。

そんな状態なので、お二人が何を話しているのかさっぱりなのだけれど、音だけ聞いていると、どうもセパシウスさんの言葉が英語ではなくなっているような。

公子サマと同じ、お国の言葉？を喋っている気がします。ちよつと興奮してるみたいですし、思わず母国語に戻ってしまったのでしょうか？

公子サマの方はセパシウスさんほど興奮してはいないけれど、ずっと浮かべていらした笑みはさすがに消えて、厳しい口調になっています。

……えーっと、こういう時ってどうすれば良いのでしょうか？

慣れない状況にオロオロとしてしまった私。

そこへ。

ドン！！！！

テーブルを握り拳で叩く音と

「あんたら、本題に入る気が無いんならとっとと帰るか？ああ！？」  
祥くんのドスの効いた声が響いた。

これにさすがにお二人の口論もピタリと止まる。

…口論だけじゃなく、動きも止まったようです。あ、ユーリくん、瞬きも止まってるよ。

……祥くん、ありがたいけど、本当にありがたいけど。

……祥くんて、本当に役場の職員なんだよね？ヤの付く職業の人じゃなくて。

## 24話 翌日自宅にて 13 (後書き)

今度こそ本題に入れると思ったのですが、何でこう……orz  
いい加減このパート終わらせたいと、本気で思っております。  
(引っ張った挙句、結局それかい！と言われそうで怖い……)

次……次こそ！

## 25話 翌日自宅にて 14（前書き）

東北・関東大震災の犠牲者の皆様にお悔やみを申し上げますとともに、被災され今なお困難な状況下におられる方々に心からお見舞い申し上げます。

## 25話 翌日自宅にて 14

祥くんのおかげで、とりあえず公子サマとセパシウスさんも落ち着いたよう。

……さすがに訪問先で口論になったのが恥ずかしいのか、ちょっと姿勢があらたまった感じがします。

あれ？この雰囲気どつかで……うーん、思い出せません。こういうのを既視感デジャ・ヴというのでしょうか？

本題に入る前に、さっきのセパシウスさんの語りみたいなことになった時に備えて、お水を用意することに。

ただのお水と侮ること勿れなか！これは地元の湧き水——このあたりは一家に一本敷設——なのです。ミネラルを適度に含みつつ、やさしい口当たりの軟水はファンも多く、わざわざ県外から公共の水場まで汲みに来る人も多いのです！

……そういえば欧米の方は硬水に慣れているのでしたっけ。

……一応、ローズウォーター作れるように準備をしておきましょう。レモンでもあれば輪切りにして浮かべたんですけど……ホントにお買い物行かなきゃ、です。

あまり奥に行かなくてすむように、ピッチャーに氷水を入れて一緒に持って行く。お冷を皆さんの前に配り、これでOK。

「お待たせいたしました、それではお話の続きをお願いします」  
席に着いて、ペコリとお辞儀をした。

ウオッホン！

大きく咳払いをしたセパシウスさん。

頬の辺りが薄紅色なのは言わないでお願いします。

『――――，――――』  
「先ほどはお見苦しいところをお見せし、たいへん失礼いたしました」

『――，――――，――――』  
――――』

「これから、私たちが本日こちらへお伺いした用件について説明いたしたく存じます」

いよいよですね。

こちらでも思わず背筋が伸びます。

『――――，――――』  
――――』

「当方の抱える問題について、そもその背景を簡単に申し上げますと――」

そう言ってセパシウスさんが、今度は簡単に説明してくれたのが、

クロウシェン公国は永世中立国であるが、非武装である（代表的なスイスは武装の永世中立国）

軍隊は数代前に廃止され、同盟に基づき隣国がクロウシェン公国の防衛も担当している（警察はクロウシェン公国も保有）

クロウシェン公爵位は直系のみ継承権を有し、継承権保持者が絶えれば公国の統治権は隣国に移譲される  
ということだった。

『――――，――――』  
――――』

「この場合の‘直系’とは、長子長男という意味ではなく、クロウシェン公爵――大公閣下のお子様たちを指します」

『――――，――――』  
――――』



――』

「公爵位が次の世代に継がれた時点で、先代のご兄弟は継承権を失うのです」

……えーっと、つまり、今の公爵サマの継承権は、公子サマやそのご兄弟姉妹が持っていて、公爵サマの兄弟姉妹は（もし居たとしても）継承権が無い、と。

そういうことですか？と聞いてみると、返ってきたのは肯定。  
でも……

「しかし、それじゃあ公子サマの国の統治権を手に入れるために隣国の上層部が公爵ご一家暗殺、なんてことになるんじゃないのか？」  
考え付いても言いにくいことをズバッと聞いたのはやはり祥くん。  
しかしこれは、公子サマにきっぱりと否定されてしまった。曰く  
『……………』

「メリットがありません」  
とのこと。

『……………』

「私たち一家が揃って事故等の不自然な死に方をした場合、真っ先に疑われるのは隣国です」

『……………』

「そうなれば内外から強い非難が浴びせられ、統治権の移行はまず実行不可能になるでしょう」

『……………』

「隣国を陥れるために第三国が仕掛けるというのも、隣国がやはり

永世中立国であることを考えれば勢力図の変動に結びつきにくく、可能性は低いでしょう」

淀みなく説明されると、なるほどと納得。

『、』

「それに、隣国に移譲されるのはあくまでも公国の統治権のみです」

『、』

『』

「公爵一家の私的財産は傍系一族に分与相続されるため、隣国が私たち一家を抹殺しても益は無いのです」

へえー。日本の一般庶民にとってはドラマのようなお話ですねー。

## 25話 翌日自宅にて 14（後書き）

私の所は今回の震災の影響は受けていません。

所用により更新できず、心配された方もいらっしやったのではないかと、申し訳なく思っています。

せめて今できることをやって、少しでも被災地の皆様のお役に立てればと思っています——と言っても義捐金や節電くらいなのが……

先週分、というわけでもないのですが、もう1話書いている分を投稿したいと思っています。

よろしければどうぞご覧下さい。

## 26話 翌日自宅にて 15

「しかしそうなると、こんどはその財産を目当てに親族が、つてことにはならないのか？」

さらに質問する祥くん。

……食いつきますね。普段はあんまりこういう‘お家騒動’とか‘家族間抗争’とかって好きじゃなかったと思うんだけど。根が単純だから。

『~~~~~』

「財産と言っても、そのほとんどが先祖代々受け継いだ土地・建物といった不動産です」

『~~~~~』

「下手に売り払うと、お金に困っている’と言われて貴族としては不名誉なことになります」

『~~~~~』

「城の中の動産——美術品等は、これも先祖伝来のもので、公国から文化財指定を受けているものも多く、勝手に処分できないものばかりです」

『~~~~~』

「中にはかつて仕えた皇帝からの下賜品などもありますし、実際に生活している私達も壊さないようビクビクしています」

最後は冗談っぽく肩をすくめながら言ったので、思わず笑ってしまいました。

確かに、お祖母ちゃんが大切にしていた大きな絵皿、洗うだけでも手を滑らせたりしないか冷や冷やしていたのに、それがもつと高級だって分かっている品だったりしたら……とても持てません。

[illegible]

「そして、ここからが本題なのですが……」

私の笑いがおさまるのを待って、またセパシウスさんに戻る。

[illegible]

「暗殺云々はさて置き、このような事情により、我が国では継承権を持つ者を絶やさぬよう、ある不文律がございます」

[illegible]

「それは、公爵位を継ぐ者は、結婚し2名以上の子をもうける、というものでございます」

,

「そのため、代々の大公閣下は皆様早婚でございました」

へえー、そうなんですか。

私は別に王室ファンとかではないので、そういう‘ロイヤルフアマリリー’（でいいんですよね？）のお家事情とかはまったく知らなかったのだけれど、こうしてお話していただくと面白いと思うものです。

\_\_\_\_\_ ! \_\_\_\_\_ !

おっと、ここでセパシウスさんのテンションが急上昇です。

[illegible]

「しかしながら、第17代公爵となられる予定のクラウド殿下はご結婚どころか婚約者もおらず、周囲の者も皆焦っている次第でございます」

白いハンカチを取り出し、目に当てています。

でも……

「さっき28歳って言ってなかったか？ そんなに焦らなくても良いんじゃない……」

そうそう、祥くんの言うとおりですよ。こくこく頷く私。

女性は第一子を出産する好ましい時期とかがあるみたいだけど、公子サマは男性だからそんな関係ないだろうし。日本の男性なんて30代で結婚する人が多いんですから。

それに、公子サマならいくらでもご縁があると思うんですけど……。

『――――、――――――――――、――――――――――、――――――――――』

「殿下のお父君、大公閣下が殿下のお歳の時には既にご成婚され、お子様もいらっしゃり、公爵位を継ぐ準備をしておられました」

『――――――――――、――――――――――、――――――――――』

「しかしながらクラウド殿下には女性の影すらなく、ゴシップ誌に『聖職者のよう』と書かれる始末」

ゴシップ誌に女性との記事が載らなくて嘆かれるって、どんだけ……？？

『――――――――――、――――――――――……』

「何より絶望的なのは、クラウド殿下は……」

「殿下は？」

言いよどむセパシウスさんに、思わず先を促す私。  
ここまで来てタメは無いでしょう。

『――――！！』

「殿下は女嫌いなのでございます」

セパシウスさんの叫びに、変わらず落ち着いたユーリクんの声。  
おんなぎらい、オンナギライ……って、あの？

「「はぁ!？」」

今度は私と祥くんの叫びが同時だった。

## 26話 翌日自宅にて 15（後書き）

ようやく…というか、まだここって……orz

……頑張りますとしか言えませんが……頑張ります。



## 27話 翌日自宅にて 16

‘女嫌い’ と言えー

「女なんて生き物は俺に近寄るんじゃないやねえ！」とかいう、硬派なイメージのあれですか!？」

「女が怖い」とか言って女に近寄られると怯えるアレか!？」

私と祥くん2人して叫んだけれど、見事に方向性がズレズレ。

そうですか、祥くんの考える‘女嫌い’ って、恐怖症の方なんだ……。

「……日本で‘女嫌い’ と言いますと、そのような意味になるのでしょうか？」

少しとまどったように聞き返してくるのはユーリくん。

と言う事は、私たちが言ったようなタイプの女嫌いというわけではないってことですね。

「うーんと、‘女の人を嫌う’ っていう意味だから、どういう嫌い方をするかは結構個人差がある：かな？」

私の周囲にそういう人が居ないから——さっき言ったのは伽菜ちゃん漫画に出てきたキャラです——一般論しか言えないけれど、ユーリくんは納得してくれたよう。

『——，————————』

「いいえ、そういうことではございません」

ユーリくんの説明を聞いたセパシウスさんはハンカチを目に当てたまま首を横に振った。

まあ、昨日の様子だと、確かにどちらも当てはまらないよう……

な……あれ？

よくよく考えれば、私、昨日公子サマに抱きつかれたりとか、キスされたりとかなんとかされましたよね？

でも、今確かに‘女嫌い’って……あれ？それって……

「まさか……」

その時、祥くんが椅子ごと身を引きながら言った。

「男の方が好きって言うんじゃない……」

「な……」

さすがのユーリくんも絶句。

そして私も絶句……と言うかショックを受けてます。だって。

公子サマは男の方が好き＋私に抱きついたりキスしたりした＝私のことを男だと思った

——ということですよ？

まさか女と思われてなかったなんて！！

……自分でも意外なほどにショックです。大ダメージです。

そりゃあ体型はボン・キュッ・ボンじゃないし、顔だって華やかな人目を引く美人でもなければ今時の可愛い系でもないけど、けどっ！

男の人に間違われなくらいの曲線は（相当ささやかかもしれないけれど）あるし、顔だって平凡で十人並みなのは分かっているけれど平凡な‘女性’の顔だと思っていたのに……なの……。私の勝手な思い込みだったんでしょうか？

学生時代に彼氏ができなかったのって、私が引いてたからじゃない

くて、実は私が男の子にしか見えなくて男子のほうに引いてたとか？  
いいえ、それより「下の豊嶋さんのお孫さん、女の子なのに男の子にしか見えないわねえ」「ホントねえ、あれじゃあお嫁の貰い手が無いわねえ」とかご近所に思われてて、お祖母ちゃんが肩身の狭い思いをしたとか!?

そんな考えが後から後から湧いてきて、ダメージがどんどん追加されていきます。

……このままいくと2、3年後にお見合いして、こんな私でも良いつて言ってくれる優しい人を探して結婚するのかなあ……とか思っていたのだけれど。

そうですか、こんな私じゃ、それすらも夢物語……。

お祖母ちゃんが伝えてくれたみたい、故郷ふるさとを大切に子孫に伝えていくという夢が……夢があ……ガックリ。

ふえーん、泣きそうです。

——と、そこで。

「何が無礼な！そんなことはありません!!」

バンツとテーブルを叩き、ようやく硬直が解けたらしいユーリくんが、会って初めて血相を変えて叫んだ。

何事かと戸惑っていた公子サマとセパシウスさんも、ここでもうやく通訳されギョツとする。——あ、セパシウスさん、涙が止まっていたみたいです。ハンカチを下ろしました。

『——————————————————————!』

「間違ってもクラウド殿下は男色ではございません!」

顔を赤くして、祥くんの‘女嫌い’、‘男好き’、説を否定するセパシウスさん。

え？と言うことは、私はちゃんと女性に見えるということでしょうか？

**27話 翌日自宅にて 16 (後書き)**

今年はなかなか春が来ないですね。  
これ以上寒気が来ないことを祈るばかりです。

## 28話 翌日自宅にて 17

『――――、――――』

「そういった種類のものではなく、一種のアレルギーのようなものです」

アレルギー？じゃあ、私が男性に見えるというわけではないんですね！

……我ながら現金なもので、公子サマの男好きが否定されると途端に立ち直ってきました。

だってもう、本当にショックだったんですよ、今の。これまでの24年の人生にかつて無かったほどの大大大ショック。

自分のこれからが消え失せようとしたのですから無理もないのですが……あゝ、ほんとに涙が滲みました。

嬉しさに思わずニッコリしたら、気まずかったのか公子サマが目を逸らしましたが、もう大丈夫！気になりますよ〜♪

「アレルギーと言うと、女性に近づく<sup>じんましん</sup>と蕁麻疹が出るとかですか？」  
立ち直りはしたものの、やっぱり気になるので確認です。

ウオッホン！

咳払いをするセパシウスさん。

『――――』

「蕁麻疹ではございません」

「アレルギーだけど蕁麻疹じゃない？」

『――、――――』

「はい、蕁麻疹ではございません」

「じゃあ何なんだ？」

あ、引いていた祥くんが戻ってきました。

コホン。

もひとつ咳払いのセパシウスさん。

…そんなに言いづらいことなんでしょうか？

『――――…』

「何と申しましょうか……」

なかなか焦らしてくださるセパシウスさんに、固唾<sup>かたず</sup>を呑む私。

もうここまで来ているのですから深く考えずに仰ってください！

じっとセパシウスさんを見つめると、セパシウスさんは大きく息を吸い、はぁーと一つ特大の溜め息をついたその最後にボソリと呟<sup>つぶや</sup>いた。

『――――』

「‘ニオイ’です」

………

‘ニオイ’と言うとあれですよ、鼻で嗅<sup>か</sup>ぐ。

でも、それでアレルギーと言うと……？？

「あれか？女の香水がやたらに鼻についてクシャミが止まらねえとか？」

自分の体験なんでしょうか、鼻にすっごい皺よってますよ、祥くん。

でも、それなら分かります。時々いますよね、すっごく強くおう人。

‘付けている本人は鼻が慣れちゃってどんどん濃くなっていく’って聞いたことがあるし。

ニオイに敏感な人で自分の嫌いなニオイなら、花粉症みたいにクシャミ・鼻水が止まらないということもあるかもしれないね。

「それは――」 大変ですね、と続けようとしたのだけれど。

『・~~~~~』

~~~~~』

「いいえ。香水の有る無しに関係なく、女性のニオイそのものが苦痛で堪<sup>たま</sup>らないのです」

公子サマが首を横に振って、悲しそうにそう言った。



## 29話 翌日自宅にて 18

例えば。

どんなに美しく咲いた花があったとして、ヘドロのような臭いをさせていたら誰も部屋に飾りはしないだろう。

どんなに美味しそうに飾り付けられた料理があったとして、腐った生ゴミの臭いを漂わせていたら誰も食卓にのせはしないだろう。

私にとって女性とはそういうものなのです。

公子サマはそう言った。

口元は微笑みの形を作ってはいたけれど、見ている方が遣る瀬無くなる、そんな笑み。

『――――――――――，――――――――――』

「殿下のお体を専門機関で検査しましたが、脳にも神経にも異常は見当たらないとの事」

『――，――――――――――――――――，――――，――――――――――』

「ただ、妙齢の女性の香りが非常にご不快に感じるとのこと、脳波等の測定でもそれは検証されております」

それはまた何とも……。

公子サマとセパシウスさんの説明に、さすがに言葉が出ない私と祥くん。

だって、一国の統治者の第一継承権保有者で、しかも継承のためには結婚して子供を作らなきゃいけないのに、女性の香りがダメだなんて……。

「なあ」

いささか重い沈黙の後、祥くんが口を開いた。

「相手に徹底的に体を洗って消臭スプレーをかけるとか、公子サマが好むような香水をつけてもらうとかじゃダメなのか？」

あ、なるほど。

『――――――――――』

「そういった方法は全て試してみましたが……」

まあ、この場ですぐ思いつくようなことはお話し済みですよ。

『――――』

「まず人が生物である以上、一瞬は臭いを消せても消し続けることはできません」

そうですね。どんなにこまめに洗っても、シイさんやムウくんの犬の臭いは出てきますしね。

『――――――――――』

「それに、香水の状態では好ましい香りでも女性が付けた途端により酷い悪臭になるようでして……」

あららら。まあ、香水は変化を楽しむ面もありますからねえ。でも悪臭だなんて……。

『――――――――――』

「女性の客人とのご面談の後に青い顔をして洗面台でお戻しになる殿下のお姿に、私はいつも涙が止まらず……」

その光景を思い出したのか、また涙ぐんでハンカチを目に当てるセパシウスさん。

……今度はこっちまで目が熱くなってしまいました。さっき涙目

になったせいで涙腺が緩んでいるようです。

『~~~~~』

「こうした体質は一族特有のものらしく、数代おきに現れるようなのです」

隔世遺伝というものですね。

『~~~~~』

「私の曾祖父は味覚に異常があったと聞いています」

『~~~~~』

~~~~~』

「人生の伴侶を探すために‘味見’をしなければならなかった曾祖父に比べれば、私の嗅覚はまだマシですよ」

女性相手に‘味見’って……。

どう考えても微妙な表現に、しんみりした空気（&私の涙）が吹っ飛びました。

### 30話 翌日自宅にて 19

‘味見’、というと‘舌’、という感覚器官を使って、料理の味を確かめる’、というアレですよ？

‘塩加減どうかな？’ んー、あと一つまみね♪、みたいな。

でも、伴侶——結婚相手を探すのに‘味見’、って、‘味見’、って……。

まさか幾人もの女性のお肌の塩加減を見て回って決めたとかじゃないですよえ……？？

………ごめんなさい、私の貧相な想像力&経験値ではちょっと無理です。想像できません。

「…俺たち日本人に理解できねえ外国人のユーモアセンスというヤツか？ それとも少年の単語の選択ミスか？ いやいや……」

祥くんも何やらブツブツ言ってます。

そっか、ユーリくんの通訳ミスってことも考えられるんだ。……ここまでの通訳のレベルでは可能性低いと思うけど。

……。

………。

詳しいことは気にはなかったけれど、公子サマたちに確認するととても後悔しそうな気がしました。

その公子サマたちお三方は、微妙な雰囲気になった私と祥くんに「どうかしたのですか？」的な視線を向けて来る。

向けて来るのだが……さすがに、やっぱり、「舐めるんですか？」なんて聞けません（心中半泣き）。

「えっと……」

何か他に話を振らないと——そうして内心焦った私の口から飛び出したのは

「下のごきょうだいたちは、この件についてどんなお考えなんですか？」

という、これはこれで微妙な言葉。

言っただけで後悔しました。ええ。

ただでさえ一国のロイヤルファミリーの‘隣国との事情’だの、‘次期統治者の困った体質’だの、‘私達みたいな一般人が知って良いんですか！?’と言うような、できれば聞きたくなかった、ネタ満載なのに……。

どーして自分から穴に飛び降りるようなマネしてるんですかつ、私!!

そんな、密かに頭を抱えている私に対し、

『~~~~~』

「正直なところを言わせていただければ——」

と、まじめに答えてくれる公子サマ。

『~~~~~』

『~~~~~』

「……私が第一位ということになってはいますが、下の弟たちの誰かが継いで、その補佐でも良いと思っていますのです」

その言葉に何か言おうとした——たぶん公子サマの言葉に反論しようとしたのだろうけれど——セパシウスさんを公子サマは片手を挙げて遮り、

『~~~~~』

~~~~~

」』

「しかし、すぐ下の妹は、好きな人と結婚したいから継ぎたくない、と考えていますし、上の弟は、補佐はするが基本は好きな仕事をしたい」と友人によく言っているようです」

」』

「もちろん、妹弟たちは私のことを慮おもって大っぴらには言いませんが」

」』

」』

「下の弟は、自分の将来を決めるにはまだ幼く、今のうちから継承者の座を押し付けたくは無いです」

」』

」』

「結果として、私が第一位継承者としてこの、病氣、——敢えて、病氣、と言わせていただきますが、克服する努力をしなければなりません」

凜として仰った。

### 30話 翌日自宅にて 19（後書き）

予定では、次かその次くらいで（ようやく；）『翌日自宅にて』  
部分が終えられる：ハズ……：されると良いなあ（遠い目）

### 31話 翌日自宅にて 20

う、わー。

ご長男さんです。きょうだい思いのご長男さんがここにいらっしやいます！

家を継ぐ自覚をちゃんと持って、弟さんや妹さんを守ろうとする、ご長男さんが私の目の前に！！

すみません、私、今とっても感動しています。

むかし昔（お祖父ちゃんや曾お祖父ちゃんの頃）、農家は長男が全てを継いで、次男以下はよそへ奉公に出るというのが当たり前だった。

今は、大学まで進学して、そのまま都市部で就職して結婚して家を買って子育てして……長男といえども必ずしも‘百姓’にならなくなってしまう……伯父さんみたいに。

もちろん、今は昔みたいに農業だけで生活していくのが難しいっていうのは分かっている。

……でも、60代70代のお爺ちゃんお婆ちゃん達が、‘都市部に出ている息子さんが帰って来て継いでくれるかもしれないから’、って懸命に田畑を守っている姿を見ると。そして、山の手の方の機械が入れない田畑の面倒が見られなくなって耕作放棄地——手入れされないまま荒れていく田畑——を目にすると。

どうして皆ほったらかしにできるのだろう、帰らずにいられるのだろうか、思ってしまう。

あ、皆が皆そういう人たちばかりじゃないのも知ってますよ。



慶くん——ハトコの慶くん、祥くんのお兄さんね——は大学を出た後地元に戻って来て農協に就職し、土日や農繁期には小父さん——慶くんや祥くんのお父さん——のお手伝いをしていて、ゆくゆくは家を継ぐって言っている。

それに祥くんも、次男だけどやっぱり大学卒業してからこっちの役場に就職して、仕事がお休みの時——農繁期にはお休み取ったりして——手伝っているし（あくまで、手伝い）で、公務員の、兼業禁止、に抵触しないとか何とか言っていたけど、本当に大丈夫なのかな？）。

でも、日本の農業の現状を見れば、後継者不足・担い手不足、というのは深刻な課題で。

それに加えて、一人っ子の私にとっては弟や妹を守る、お兄ちゃん、というのは、自分にもいたら良いのに、という憧れの存在で。

だから、そういう諸々——連綿と継承されてきたものを担う自覚と下のきょうだいたちへの思いやり——を体現した公子サマに。そういう存在が自分の目の前に居るということに。すっかり感動してしまったわけですよ。

そんな状態だった私なので。

『~~~~~』

「そういうわけですから、私の、病氣、克服のために、ぜひ貴女に力を貸していただきたいのです」

と公子サマに言われて、

「はいっ！私でできることでしたら喜んで！」  
って答えてしまったのも無理はないことです……よね？

あれ？

あのく祥くん、どうして右手で目を覆って「あちゃ」みたいな表情しているんでしょうか？

それに、私の返事を聞いた公子サマ。浮かべたスマイルが‘にっこり’王子様というより微妙に‘にやり’悪者系寄りに見えるのは、私の気のせい…です…よ…ね…？？

えーっと。

もしかして私、何か早まったんでしょうか…？？

### 31話 翌日自宅にて 20（後書き）

せめて週一更新をと思うのですが、とんでしまって心苦しいです。

職場の配置換えがあり、予想もしなかったところに動いて仕事を  
一から覚える羽目になりました：orz

多少残業しなければならいかもしれませんが、一応カレンダー  
どりの連休（のハズ）ですので、今のうちに少しでも進めたいと  
思います。

今しばらくお付き合いいただけるとありがたいです。



それを聞いて安心しました。

「……それで、具体的には何をしたらよろしいんでしょうか？ 私なんかができることと言っても、たかが知れていると思いますけど」  
安心したところで次に気になる点を尋ねる（え？ 寧ろこっちが本題？）。

私の問いに、

『――……』

ここぞとばかりに身を乗り出し話し出そうとしたセパシウスさんを公子サマが右手で制し、

『~~~~~』

「どうか私の友人となってください」  
とのたまわれた。

「友人……ですか？」

更に首を傾げる私。

公子サマと友人……ちょっと想像が付きません。

傲慢じゃありませんが、‘友人’と言えば女性ばかり。男性で‘友人’と呼べる存在は居なかったりします（‘彼氏’ない歴Ⅱ年齢’は伊達じゃありません）。

地元の小中学生の時のクラスメートの男子も勿論いるけれど、せいぜい会った時に挨拶するくらい。しかも田舎で校区が広いし地元を離れているコも多いから、滅多に出くわしません——と言うか、滅多に会わなくて顔見ても誰だかわからない人もいます（お恥ずかしい話ですけど……）。

祥くんや慶くんは親戚兼幼馴染みなので、あまり参考にはなりませんし（遠慮無い言動は物心ついた頃からのお付き合いあってこそですからね）。

「ちなみに、友人と言うとどうすれば良いのでしょうか？」  
分からないことは聞いてみるのが一番！——ということでは、  
ここに、スマイルに戻った（？）公子サマに聞いてみました。  
に

### 32話 翌日自宅にて 21（後書き）

GWで頑張りたいと言いつつ実行できなかった自分に鬱です。

次で一応、翌日自宅、パートは終了（の予定）です。

……たぶん（汗）

### 33話 翌日自宅にて 22

質問に対する公子サマからのご回答。

その1、公子サマが日本に来たときに会って食事をしたりする。

その2、メールで互いの日常を毎日連絡しあう。

……。

その1は分かります。

誰かと一緒にお喋りしながらおいしい物を食べるのはとっても楽しいですね。

その2は……親しい友達と「元気？今何してる？」とか「こんなことがあったの！」とかメール連絡をすることもあるけれど、毎日じゃないですね？

と疑問に思ったものの、要は私の生活スタイル——食事や睡眠など——を知って、他の女性に試してもらいたいと説明されれば、それはそれで納得しました。

「体質改善なんてそんなすぐにできるもんじゃないだろ。ずーっとなんて続けられんのか？」

って祥くんは（私を心配して？）言ってくれたけど、これまでずっとその‘病気’のせいで辛い思いをしてきた公子サマのことを考えると、毎日の報告くらい「別にそれくらい」って思えます。

それに、公子サマからも「たいへん申し訳ございません」オーラが感じられ。

……ひょっとして昨晚の耳垂れ大型犬の再臨？ あうう、尚更嫌だなんて言えません。

それはまあ良いんですけれど。



それよりも気になるのが、セパシウスさん。

公子サマが‘友人’について説明し始めたときに何か言おうとしてその右手に遮られていたのだけれど、それでも言いつのろうとしたせいか、今やがちり公子サマの右手に口を押さえ込まれてしまっているのです。——いやいや、口というより顔の半分でしょうか？公子サマは身長が面白いせいか手も大きい感じがすし。

公子サマの涼しいお顔——感心します！——とは対照的に、公子サマの手を外そうと顔を赤くして頑張っているらしいセパシウスさん。なんだか顔色が青から紫っぽくなってきているように見えるのは気のせいでしょうか？

……って、大きな手が口と鼻と塞いでる！？息ができてませんよ！！

「公子サマっ！セ、セ、セパシウスさんの息止めてますっ！！」  
慌てて叫んだ私の声に、ようやく気づいたらしい公子サマがパツと手を離す。テーブルに突っ伏して大きく喘ぐセパシウスさん。間に合ったようでほっとしました。

『~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~？』

「それで、引き受けていただけますでしょうか？」

セパシウスさんに向いていた視線が引き戻されます。

ユーリくんも本当に動じませんねえ。酸素を取り込むのに喘ぎすぎたのか今度はゲホゲホ咳きこむセパシウスさんに目もくれません。  
‘友人依頼’への返事を求められているのは分かるのだけれど。

……すみません、セパシウスさんの顔色が気になって、最後のほう聞いていませんでした。

「最初の二つは分かりましたけれど……」

ちらりと祥くんを見ると、

「……めに来いってよ」

ボソリと言われる。

「へ？」祥くん、もっとはつきり言ってくれないとよく聞こえませ

んよ？

来いって何しに？どこへ？

またまた首を傾げる私の頭の上にハテナマークがいつぱい浮いていたのだろう。

[illegible]

「いつか、貴女の準備ができれば、クロウシェン公国に来て頂けますか？」

公子サマが優しい笑顔と共にもう一度言ってくれた。さった。

ああ、遊びに来てってことですね？

「両親やきょうだい達にも紹介したいと思っています」

まあ、公子サマの‘症状’が出ないレアケースですしね。協力者を見せておきたいのは当然でしょう。

思わずコクコクと頷く。

「公子サマの事情はよく分かりました。本当に私でお力になれるのか分かりませんが、精一杯協力させていただきます」

そう言った私に。

! ?

「…本当にございますか」

セパシウスさんがテーブルに身を乗り出して、私の手をガツと握り締めました。

……ご生還＆復活、おめでとうございます。

### 33話 翌日自宅にて 22（後書き）

一ヶ月も間があいてしまいました。

大変申し訳ございません。

。　　どうかこんなばかりで本当に申し訳ございません（平身低頭）

。　　コンスタントに投稿されている方が羨ましゅうございます。

‘ 翌日自宅にて ’ はここまでです（な…長かった…）。

次回は ‘ 公子サマの（ささやかな）逆襲（裏タイトル） ’ の予定  
なので…

……予定どおりにいかなかったらすみません。

【以下、一ヶ月もあいた説明（読み飛ばし推奨）】

所用があつて外出し、氣力が尽きて書けなかった一週目はともかくとして。

二週目は本置き場に積んであつた小説の山が雪崩れて復旧作業に時間と労力を費やし。

（→おとん、だから貴方は立ち入り禁止だって！そのメタボな腹が支えるに決まってるじゃん＞泣く）

更には夏風邪を引いて寝込むこと二週間（咳と鼻水で体力ゲージ  
ごっそり持ってかれましたねえ＞遠い目）。

…いやもお呪われてるとしか思えないような一ヶ月でございました。

微熱が下がらず「もおこれ微熱じゃなくて平熱が5分上がったと

かじゃないのかしらウフフウ」とか……。

夏風邪、さりげなく流行っているみたい（しかも異常にしつこい）  
です。皆様どうかご自愛ください。

### 34話 翌日お見送り 1（前書き）

道路交通法に抵触している表現がありますが、話の流れということでご容赦ください。

真似なさないようにお願いします。

### 34話 翌日お見送り 1

またも涙目になりつつあるセパシウスさんをベリツと音がしそうな勢いで、でも優雅に引き剥がしたのは公子サマ。

…これが‘首根っこを引っ掴む’ということでしょうか。

『~~~~』

「それでは用も済んだことです、私たちは失礼いたします」

公子サマのお言葉に何か言おうとするセパシウスさん。しかし公子サマが耳元で何か囁くと大人しく頷く。

…：せっかく元に戻った顔色がすこし青ざめたように見えるのは気のせいでしょうか？

気がつけば時間はもう12時をとくに過ぎていました。

まあ、なんやかやとありましたしね。

本当は何かお昼を召し上がりませんかとお誘いすべきところなのだけれど、いかんせん昨日まで数日間留守にしていた、しかも買い物にまだ出ていないとなればロクな食材が無いという有様で。とてもお誘いできる状況では無かったりいたします。

そんな私の悩ましい思いを読みとったわけではないのですが  
『~~~~』

「慌ただしくて申し訳ございません。午後にも予定がありまして」  
『~~~~』

~~~~~

「急にこちらへ来ることにしたものですから、ゆっくりお邪魔する余裕が無いのです」

『~~~~~』

「重ね重ね失礼をお許しく下さい」

とご丁寧に言われてしまいました。

「いえいえ、こちらこそ、何のおもてなしもできませんで申し訳ございません」

思わず深々とお辞儀を返してしまいます。

お見送りのために外に出てはたと気付きました。

そう言えば皆さん、祥くんの車（軽トラック）に公子サマ以外ドナドナ状態で来たんでした。と言う事はですよ、このままでは帰りも同じドナドナ状態ではないですか！

さすがにそんな状態で帰らせるわけにはいきません！おばあちゃんが云々以前にダメです！！

「私も車を出しますから、乗ってってください！」

叫んで、免許証や鍵、お財布など一式入った手提げ鞆を取りに家に駆け込む。自分の部屋に置いていたそれを手に持ってすぐさま再び外へ。

誰がどの車に乗るか——そもそも祥くんの軽トラックと私の軽自動車（4人乗り）だといずれにしても1人乗れないことが分かった——で少しもめたものの、公子サマの鶴の一声で結局、公子サマとユーリくんが祥くんの軽トラックに、セパシウスさんとSPのお二人が私の軽自動車に乗ることになった。

セパシウスさんは公子サマを私の隣に乗せることに最後までこだわったけれど、これで何とか荷台に乗る人はいない——ユーリくんが無理矢理祥くんと公子サマの間に収まることになった（ホントはいけないんですけど！）——ワケで、まあ次善の策です。

祥くん、そんな露骨に嫌そうな顔しないで！狭いのはわかるけど、ちよつとの間だから我慢してください！！

あと、こんな時に限ってお巡りさん立ってませんように……南無南無。

そんなこんなで公子サマの車が停めてあるゲートボール場までやってきた私たち。

幸いなことに——いつものとおりとさえいえばそうなんですけど——途中お巡りさんに止められることもなく到着です。

田圃に囲まれたこのゲートボール場の駐車場はかなり広い——なんてったって、来る人皆車ですから！

そんな駐車場に只今で——と停まっているのが——ああ、やっぱり昨日の大きな黒塗り車でした。

車内で待っていた運転手さんが、こちらを見て降りてこられるのが見えます。

目立つことこの上ない車から少し離れて自分たちの車を停める様くんと私。

……コワくてあんまり近くに停めたくありません。

お見送りのために車を降りたものの、公子サマたちの車を直視するのとはばかられ思わず遠くを見渡せば、田圃数枚を隔てたところ——100mほど向こう——に建っている3階建ての農協の建物が目に入る。

そう言えば今日は平日だから、慶くんや美弥ちゃんいるんだろうなあ……なんて頭に浮かんでくる。……まさか、向こうから今こっちを見てるなんてこと……無いです……よね……？

見られていた日には電話ないしは本人が自宅に押し寄せ事情をあれこれ聞かれること間違い無しです。農協の中からもですが、今更ながら自宅のご近所さんに公子サマご一行が見られてないことを切に願います。

——と、脳内で頭を抱えていると。

『~~~~~』

「送っていただいてありがとうございます」

振り返ると、すぐ後ろに公子サマが立ってらっしゃいました。





### 34話 翌日お見送り 1 (後書き)

やはりと申しましょうか、公子サマの逆襲、までたどり着けませんでした (orz)

しかし、ポジションにはつきましたので、次回こそは公子サマやってくださることでしょう。…………たぶん。(↑殴

### 35話 翌日お見送り 2

目の前に広がるのは一面の青空。高く高くどこまでも澄み切った雲一つ無い快晴。文字通り五月晴れの今日皆様いかがお過ごしでしょうか？

私はこのとおり、空を見上げています。がっちり空です。ええ、空しか見えません。

……あ、いま小さな雲が一つ、ゆっくりと視界を横切っていきます。

そう言えば、空の何割以上が雲だったら‘曇り’で、何割以下（未満？）だったら‘快晴’でしたっけ？むかし昔、理科の時に習った気がしますが、もう憶えていませんねえ。

……

……

……

それにしても、この見上げた体勢が続けるとけっこうキツイものですね。たとえ顎あごの下に支えがあっても、体がしっかり（がつり？）固定されていても。

3分以上は確実に経っていると思います。ひょっとしたら5分以上かも？さすがに10分は経ってないと思うんですけどね。

……そうそう、皆さんご存知でした？‘ハグ’って羽交い絞め（HAGAJIME）の‘HAG’だったんですね。（↑正しくは‘HUG’です。）

——って、私はいったい誰に向かって話してるんでしょう？すみません、ちょっと現実逃避していました。

まったく、どうしてこういうことになってるんだか……？

\*  
\* \*  
\* \* \*

\* \*

\*

『』

テレビでも滅多にお目にかからないような整った（しかも気品のある！）顔に、目の前でキラキラニッコリな挨拶をされると。

……一般庶民としては落ち着かないことこの上ありません。

「人と話す時にはちゃんと相手の方を見なさい」というおばあちゃん  
の教えがなかったら回れ右したいくらいです。

それでも綺麗な顔を直視できずに視線をウロウロとさせてしまった私に、公子サマは不審な表情一つせず、これからは名前を呼んで欲しいと仰った。

「クラウス殿下とお呼びした方がよろしいでしょうか？」と確認してみると、

~~~~~

すみません、日本人としてはいきなりのお名前呼び捨てはハード

ルが高いです。しかも相手は一国の公子サマ。

……無理です。

「では、クラウド様とお呼びいたしますね」  
百歩譲った案を出したのだけれど、

『~~~~~』

「そんなにクラウドと呼ぶのはお嫌でしょうか？」

と、ものすごくショボンとした顔をされました。またもや大型犬耳と尻尾が出現して、これでもかというくらい垂れ下がって見えません。

うっ、だからそれをされると弱いんですってばー！！

それでも救援を求めて周りを見回すと、私の右斜め後方に腕組みして立つ祥くんを発見！

……きつと縋るような視線になっていたんだと思います。

「…日本人に初対面同然の相手をいきなり呼び捨てにしろってのは——特にこいつのような性格のヤツは絶対に無理だから」

援護射撃をしてくれました。ありがとう、祥くん。今日は本当に頼りになりますね。またまた見直しましたよ！

そんなこんなで結局、公子サマのことを、‘クラウドさん’と呼ばせてもらうことになりました。

早速呼んでみてほしいと言われ、気恥ずかしく思いつつ

「それでは、至らないところがたくさんあると思いますが、これからどうぞよろしく願います、クラウドさん」

と、改めてご挨拶——お辞儀つきで——をすると、想定していた「こちらこそよろしく」ではなく

『~~~~~』

「お別れの挨拶に、ハグをしてもよろしいでしょうか？」  
というセリフが返ってきた。

.....  
はぐ?..  
?

### 35話 翌日お見送り 2 (後書き)

逆襲の公子サマ・その1、ジャブ編。

ホントはこの一話でまとめときたかったんですが…orz

先々週から残業続きで更新が遅れており、申し訳ございません。  
次の週末も遠出するので、また少し遅れるかと…(涙)

どんどん暑くなっていますが、皆様も熱中症等にお気をつけ下さいませ。

### 36話 翌日お見送り 3

とっさに思い浮かんだのが、ムウ君が嬉しそうに尻尾をパタパタ振りながらはぐはぐとかぶりつく……

「…おやつ？」

ポロツと口から零れた言葉に、公子サマーもとい、クラウドさんは（ユーリくんの通訳を聞いて）一瞬目を見張ったかと思うとプツと吹き出し、

「ククククッ……クッ、ククククク……」

………なんだか、ツボにはまったようです。

セパシウスさんや護衛さん達も、笑いが止まらない公子サマー……じやなかった、クラウドさんを見て呆氣にとられてるよう。

「頼むから日本人として恥をさらしてくるなよ。ハグつつたら西洋の挨拶、抱擁のハグに決まってるだろーが」

心底呆れたという声とともに、ペシリと祥くんに頭をはたかれる。祥くん痛いです。口だけじゃなく手も一緒に出すの止めませんか？ 呆れるのは分かるけど、子供じゃないから言ってもらえば理解できるんだから。

恥ずかしいボケをしちゃった自覚はあるけれど、でも痛いので抗議の意味を込めてム……と祥くんを睨むと、ちゃんと通じたのかちよつとたじろぐ祥くん。

………なんですか、そのシッシッて追い払うような手の動きは？

『~~~~~.~~~~~?』

「失礼しました。そう言えば日本ではこういう挨拶は一般的ではなかったのでしたね？」



私が祥くんを睨んでいる間に復活したらしい公子……クラウドさん。

『~~~~~』

「ですが、私たちの文化ではある程度親しい間柄では一般的な挨拶ですので、ぜひ貴女にも慣れてもらいたいのですが」

にこやかに微笑んでそう言われると、断りづらいのが日本人（私だけじゃないですよ？）。

恥ずかしながら祥くんに言われてようやく気付きました。あれですよね？ 海外のドラマとかで親しい友人や親戚同士で相手の体に腕を回してギュッとして離れる……。

衆人環視の中でそれをしろうと言うのは名前呼び捨てと同じくらいハードルが高いんですが。ううう……でもクラウドさん側の皆さんたちには何も特別なことではないんでしょうし、これから友人として付き合っていくことを考えれば、そんな“一般的な”ご挨拶に慣れないといけないんだろうとは思うわけで……。

えーい、田舎の女は度胸ですよっ！ がんばれ、私！！

「えっと、よろしくお願い、しま……す？」

恥ずかしいのはどうしようもないのでセパシウスさんの顔から微妙に視線をそらしてそう言う。

クラウドさんはユーリくんを手の動きで後方に留めたまま私にゆっくりと近づいて、その高い背を屈めて顔を私と同じくらいまで合わせてから、ゆっくりと腕を伸ばしてきた。

……ドラマとかだとお互いに腕を相手に回してたよね？

そう思ってこちらも（ぎこちなく？）腕を広げてみようとはしたのだけ。

うっかり見ちゃったクラウドさんの顔に浮かんだ微笑みが、妙にこう、甘く——糖度5割増し、みたいな？——見えて、うっかり固まっちゃったその隙に、両腕の上からの抱擁となってしまう。

あれ？　これだところちが腕を回せないんですけど？

一瞬そう戸惑ったものの。

まあ、初心者だから仕方がないってことで。と、自分を慰めました。

どうせすぐに終わるものですしね。

…と思っていたのですが。

5秒経ち10経ち……30秒経とうというのに解放されません。  
どころか、身じろぎすると回された腕の力が強まるような気がします。

えーっと、もしかして私が思ったハグって何か間違ってた？

……すみません、どなたか“ハグ”の定義を説明していただけないでしょうか???

### 36話 翌日お見送り 3（後書き）

クラウド「おやつ」だなんてとんでもない。こんな滅多にありつけないご馳走は、ちゃんと味わわないと」

→

だと思えますよ、清香さん。

\* \* \* \* \*  
\* \* \*

でもって、週1どころか月1になっている更新速度に申し訳が：

（orz

精進いたしますので、見捨てずお付き合いいただければありがとうございます。  
く存じます。

**37話 翌日お見送り 4 (前書き)**

すみません、短いです…

### 37話 翌日お見送り 4

——そんな、声にならずに脳内で終わった疑問の声に応えはなく。身内以外の（しかも妙齡且つ美形の）殿方に、360度フルオーブンな場所で抱きしめられてる（抱きつかれてる？）状況に耐えられなくなった私がお空の観察——という名の現実逃避——に至ることしばし。

……いえね、途中で思い切った抵抗もしてみたんですよ？

気を落ち着けようと深呼吸した時に、こ…じゃなくてクラウスさんの香水か何かなのか、シトラス系の匂いが漂ってきてですね。まあ、こんだけ密着してるので当然といえば当然なんですよ、が！自分が絶対汗臭いはず——シイさんやムウくんたちとの散歩で結構汗ばんだりしたもので——なんて思ったら、こりやもう離れなきゃでしょ！？

うっきゃーと心の中で絶叫しながらもがいてみたんですけど。

ええ、今の状況がすべてを物語っております。

駄目でした。無駄でした。徒労でした。

むしろ、「もしお昼ご飯食べてたら全部逆流したでしょう」というくらいギュウギュウに締めつけられました（泣）。

おかげさまでぐったりです（クラウスさんの肩にのった首に重みがかかってチョット痛くなりました…）。

確かあちらさまも次のご予定があったハズと思い出し、自然解放を待つことにした訳なのですが。

・・・

[illegible][illegible]

ふと心が逃避先から戻ると、やつぱり恥ずかしいんですよ（泣）

### 37話 翌日お見送り 4 (後書き)

短くてすみません。

キリが良かったのでここで一旦切らせていただきました。  
1時間ほどで次を投稿の予定です。

### 38話 翌日お見送り 5

いつ終わるとも知れない状況の中。ため息が出るのも仕方のないことで。

ハア……。

下手に身じろぎするとまた締め付けが厳しくなるかもしれないので、小さなため息（のハズ）だったのですが。

頭の位置が近いから聞こえたのでしょうか、クラウドさんがピクリと動きました。

あ、これはもしかして解放の前触れでしょうか？

心なしか、私の背中に回っている両腕の力も緩んだような気がして、期待は更に高まります。

しかし、ここで焦って獲物に逃げられ……ではなく（獲物状態はこっちですorz）、締めなおされては元も子ありません。じつと、おとなしく、チャンスを待つのです！——と集中していると。

さわり。

腰の少し下、お尻のぎりぎり上あたりを何かが触ったと思った次の瞬間。

「！＊＊？&\$☆☆\$★\*##★！？」

ぞわぞわぞわぞわーとしか表現できない、いやいや、敢えて表現するなら虫が這い上がっていくような、そんなぞわぞわ感が、私の背筋を、背筋を——！？！？！？！？！



どうやらその発生源は、公子サマの右手――腰に回されていたものが少し位置を下げた――らしいのだが。その右手が動いたたびに、ぞわぞわが、ぞわぞわがー☆＃\$％&☆!!!!!!

生まれて初めての感覚に、どう対処したら良いのかまったくわからず。体は硬直、頭は真っ白。

心の中で声にならない悲鳴を上げ続ける私。

その状態がどれだけ続いていたのか。

ふと気づくと、“ハグ（拘束）”状態はいつの間にか解かれています。

固まったままの私の両頬を公子サマの手が挟み込み。

今にも鼻が触れ合わんばかりのどアップ&艶20割増しくらいの笑顔で。なのに翡翠色の瞳は怖くなるような光を湛えて。

『~~~~~』

またしても背中にゾワリとくる声で何事かを囁いてくださり。（下がっているユーリくんの耳には届かなかったらしく、通訳してもらえなかった。）

チュツと音を立てて触れるだけのキスを私の唇に落とす（!?!?と。）と。

大きく数歩下がって普通(?)の公子サマスマイルに戻り

『~~~~~』

~~~~~』

「本日は本当にありがとうございました。どうぞこれから末永く、よろしく願います」

そう言うと、皆様大きな黒塗りの車に乗り込んで去って行った。

.....

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、さや？ 生きてるか？ 息してるか？」

祥くんの声に我に返った途端に、へなへなとその場に座り込んでしまった私。

「しょ、い、いま、な、あ、あ……（祥くん、いったい今何があったのー！？）」

ヤンキー座りで見下ろす祥くんは、私のまともに声にならない声が聞き取れたのか、ともかく。

「あーよしよし。うんうん、経験値の低いおまえには厳しー試練だったなー。頑張った頑張った」

と頭をぽんぽんと叩いて慰めて（？）くれたのだけけど。

私があうあうと涙目で見上げると、何故かそっと目を逸らし、

「あー……首のそこ赤くなってるのは虫刺されじゃねえから薬ぬっても無駄だぞ。まあ、数日で消えるから心配すんな」

とよく意味の分からないことをボソボソと言った。

だからいったいなにがおこったんですかー！！（泣）

### 38話 翌日お見送り 5 (後書き)

よ、ようやくここまで……っ (orz

いえ、もう何も言いますまい。

ここまでお読みくださった皆様、ありがとうございます。

ここでようやく折り返し、かなくと(↑すみません、あまり自信がありません

次は幕間として、祥二の視点に移ります。

清香の視点をなぞるわけではないので、数話で終わる予定です。

よろしければどうぞ今しばらくお付き合いいただければ幸いです。

### 39話 幕間：幼馴染の不運 1（前書き）

祥二視点です。

男性視点ということで、ひょっとしたら不快に思われる表現が（幕間を通して）でてくるかもしれませんが。

どうぞご了承ください。

39話 幕間..幼馴染の不運 1

鉄筋コンクリートの車庫の中、4台入るスペースの、1台分だけ空いたそこに軽トラックを停めエンジンを切る。ヘッドライトを消しサイドブレーキをかけシートベルトを外すと、疲労感がどっと押し寄せ、大きなため息とともに思わずハンドルにうつ伏せた。

……マジ疲れた。

ちらりと車内の時計を見るともうすぐ7時——当然夜の——である。冬に比べれば日が長くなってきたとは言え、まだ5月の上旬、とつくに日は暮れ真つ暗である。

本来ならばとくに帰ってきていたはずだったのだ。——予定通りならば。

もちろん、世の中予定通りにいくことばかりではないというのは重々承知している。社会人として——しかも“公僕”として時に税金泥棒などと貶されながら——2年やってきているのだ。嫌でもわかる。

しかし……。

いくら何でも今日のアレはねえだろーよ！

あれか？ 連休明けに休みを取った俺が悪かったのか？

それともてめゝの彼女、昼飯に誘おうとしたのが彼女のいねえ野郎どもの呪いでもかったつてのかよ！！

\*  
\*  
  
\*  
\*  
  
\*  
\*  
\*  
  
\*  
\*  
  
\*

俺——豊嶋祥二、24歳——がゴールデンウィーク後半の三連休明けに休みを取るの、かなり前から予定していたことだった。というのも、3日と4日に恋人との一泊旅行を企んでいたからである。兼業農家の息子にとってゴールデンウィークなんぞは労働日に他ならないのだが、そこは年頃の男だ。田舎という近所の目が厳しい地域で、一人暮らしの彼女のところにそうそう泊まり込むこともできない身としては、せっかくの連休を利用して“お泊りデート”としゃれ込んだって罰は当たらないだろう？

とはいえ、厳しい長男がきっちり作業のノルマを課してくれるのも分かっていたので、予め休みの予定を入れていたというわけである。

当日は、朝ゆっくり起きて呆れ顔のおふくろに急かされながら朝食をとり、道具の点検——油をさしたり錆を落したり——をしながらのんびり家を出た。

ノルマが残っているといっても大型連休の前半で4分の3近くを済ませていたから、そう慌てることもない。畑を二枚ほど耕し、肥料を鋤き込み、畝立てして苗を植えるのが作業の内容で、耕作と鋤き込み、畝立ては農機具——農業機械なんて言い方もあるらしいが、この地域では“農機具”が一般的だ——でやってしまうからそんなに手間はかからない。

畝立てまでを午前中ですませて、午後の作業が早く済んだら山に入って蔦でも切ってやるか——そう考えていたくらいだった。

10時過ぎに、注文していた肥料を取りに農協へ車を走らせている途中、せっかくだから小夜子——恋人の篠宮小夜子、農協職員——と昼飯を一緒に食おうと思い立った。

服装はTシャツや作業着だったが、農家だらけのこの地域で“農作業スタイルお断り”な飯屋なんぞあるはずもない。

勤務時間中に携帯電話に出ないのは分かっていたから、農協の窓口で呼び出して直接伝えればいいやと、自分の思いつきに少しばかり浮かれながら車を走らせた。

あんなことになるとは夢にも思わずに。

### 39話 幕間：幼馴染の不運 1（後書き）

これまでの本文中では祥二は“親戚”という名目で立ち会っていますが、サブタイトルでは敢えて“幼馴染”とさせていたいただきました。

（どっちも間違っではおりませんので……。）



## 40話 幕間：幼馴染の不運 2

県道沿いにある農協の、肥料等の受け渡し窓口に近い駐車場――正面玄関からは陰になった側――に軽トラックを停めた。

先に注文していた肥料を積み込んでおいても良かったが、まずは恋人とのデートの約束を取り付けておこうと思って建物の角を曲がる。途端に視界に飛び込んできたのは、玄関前にデーンと停まったデカイ黒塗りの車。県道の向こうに広がる田んぼ――植えられたばかりだろう稲の苗が並んだ――を背景にするにはあまりにミスマッチなそれに、「どこのお偉いさんの視察だ？」と内心で首を傾げつつ、農協の中に入る。

自動扉をくぐったところで視線を“デカイ黒塗り”から建物内に移す途中で、背の高い観葉植物の陰に隠れるように立って携帯の画面を覗き込んでいる女性の姿が見えた。農協の女性事務職員の制服に身を包んでいるのにモデルのような優雅さを醸し出して立つあれこそが俺の彼女の篠宮小夜子である。胸まで真っ直ぐ伸びた艶やかな黒髪が俯いた横顔を隠していたが、自分の恋人を間違えることはない。

勤務時間中にこんなところで携帯を開いてるなんぞ、彼女らしくないことだったのだが、「呼び出す手間が省けてラッキー」と思っってしまった俺は、その“らしくない”理由など考えようともせずそのまま声をかけた。

「よう、小夜子――」

次の瞬間、素早く携帯をたたんだ小夜子がかつかたと歩み寄ってきたかと思うと、Tシャツの首元を掴まれてそのまま来客用トイレの入り口（人目に付きにくい場所）まで引っ張られた。

手荒い歓迎だな、オイ。

いきなりなんだよと文句を言ってやろうとしたが、相手から先に抑えた声を叩きつけられた。

「ちよっと祥二、なんで携帯に出ないのよ!」

切れ長の目が苛立ちを込めて睨んでくる。

「なんでって言われても、運転中だったんだから仕方ないだろ」

知り合いだらけの地元で、公務員やってる俺が携帯かけながら運転しているところなんぞ見られたら、その日のうちに職場に10本以上の文句電話がかかるだろーが。

「……まあいいわ」

なんだよ、その舌打ちが聞こえそうなセリフは。まあ、小夜子だからしゃーねーかと思い、ここに来た目的を果たすべく

「ところで今日昼食を一緒に――」

食わねえか?と続けようとしたのだが、

「アンタ今日ヒマよね?」

こちらの誘いを途中でぶった切り、“暇”以外の答えを欠片も受け付けないという勢いで聞いてきた。

「はあ? 暇って言うほど暇じゃ――」

「ヒ、マ、よ、ね?」

ただでさえキツめな顔立ちの美人が、アイメイクばっちりの目ヂカラ5割増しで、落ち着いた色合いながら口紅をきっちり塗った口元だけの笑み（目元は笑ってない）を浮かべて「あたしに逆らおうっての?」と無言の迫力を込めてきたら――しかもそれが自分の恋人ときた日には――男としては頷くしかないというものである。

「で? 何をさせようってんだ?」

溜め息交じりで尋ねれば。

「おつかい、頼まれてちょーだいね?」

にっこりと、10代後半から50代後半の男なら間違いないく見惚れるような艶やかな笑みを浮かべた。――どう見ても、何かしらの

面倒事に巻き込まれるとしか思えない笑みに、再度溜め息が漏れる。

小夜子に案内されて付いて行った先は、窓口の奥にある応接室。  
ノックして扉を開けた小夜子は、一礼すると中に向かって呼びかけた。

「失礼いたします。豊嶋様としまをご案内いたしました」

「ありがとうございます、君は外してくれていいよ」

中から応えたのは、嫌になるほど聞き覚えのある声。

一歩下がった小夜子と入れ替わるように室内に踏み出せば、入り口側の下座に座っていた男——兄の豊嶋慶一としまけいいち——がこちらを振り返っていた。

兄貴は俺より3歳年上の27歳。農協職員で係長だが、課長補佐も兼任しておりこの支店で——どころか県内の農協で——一番の出世頭と言われている（らしい…小夜子談）。

兄弟だから俺と兄貴が似ているのは当たり前だが、兄貴の方が“優しい顔立ち”と評されることが多い。今は仕事向けのスタイルで、前髪をぴっちり撫で付けて細い銀フレームのメガネ（やや乱視）をかけている。そこそこ整った顔で職場の若い女たちに結婚相手の超優良株と目されているらしい（やはり小夜子談）のだが、浮いた話は聞こえてこない。……俺は、兄貴が隠すのが上手いだけで実はムツツリスケベだと睨んでいるが。

ともあれ、この兄が（いろんな意味で）“実力者”と思い知らされている弟としては、

「お忙しいところ申し訳ありませんが、お力をお貸しいただけませんか？」

余所向けモードで話しかけてくるそのにこやかさ（メガネの奥の

目が笑ってねーよ！）に、厄介事の臭いしか感じなかった。

## 40話 幕間：幼馴染の不運 2（後書き）

いつもお読みくださってありがとうございます。

“祥二の不運編”はさらっと3話程度で終わらせるはずが、2話目投稿でまだドナドナ状態に至ってないという……orz

主人公と全く被っていないシーンだから……と言いつつ、頑張りたいと思います。

#### 41話 幕間：幼馴染の不運 3

あらためて言うが、俺、豊島祥二としましょうじの本業は公務員である。間違っても農協職員ではない。

今日は片づけなきゃならない作業があつて有休を取っただけ、用があつて農協を訪れただけであつて、使いつ走りをするためでは断固としてない！

………にもかかわらず、俺がこうしてパシリをさせられているのは、農協職員である恋人と兄貴からの“申し付け”であるからだ。……はあ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

——応接室の中にいたのは、どう見ても日本人じゃねえおっさんと一部日本人っぽい子供だった。

最初に兄貴に「佐原様へのお客人」と紹介されたときは、佐原様ってどこちだ？と思ったが、耳元で「さやに会いたいらしい」と言われて分かった。大納得だ。

近所に住むさや——佐原清香——は、俺や兄貴にとっては再従姉妹はと（厳密にはちょっと違うが）兼幼馴染であり、俺の恋人の小夜子にとっては“貴重な女友達（小夜子談）”である。さらに言えば、長男意識の強い兄貴にとって、ばーさんが死んだ後一人で頑張るさやはもう一人の妹みたいに守るべき存在と位置づけられているらしく、こんな得体の知れない人物が急にさやを訪ねて来たとなれば警戒するのも当然だ。

しかし、本当に得体が知れない怪しい相手なら、この兄のことである。口八丁で追い返しそうなもんだが。

顔には出さず、心の中で首を捻っていると。

「国からのご紹介でお見えになったお客様方です。田舎道は分かりづらいので、よろしければ本日佐原様のお宅をご訪問予定の豊嶋様についてにご案内いただければと思います」

続く兄貴の言葉で、そこらあたりの疑問は解けた。

“国”というのは〇〇国とかではなく、この場合は日本の中央省庁のことである。農協の関係で言えばもちろん農林水産省。

大方、外国の政府関係者か、中央に顔の利く大手企業の関係者かなんかで、国のお役人が便宜を図るように言って来たに違いない。もちろん、こんな田舎の支店に直接ではなく、連合会や本部を通じてなんだろうが。

兄貴としても上からの命令ということで逆らえず、さりとてさや一人だけに会わせるわけにもいかないから、ちょうど休みを取っていた俺に“お目付け役”を任せようってトコだろう。

「さ——佐原さんのトコにですか……？」

だが、さやももう一人で仕事もしてんだし、そんなに過保護にしなくてもいいんじゃないか？ まあ、田舎とは言え一人暮らしの年頃の娘のトコへの客が心配なのは分からねえでもねえけどよ、爺さん手前のおっさんと子供だろ？

本当にそんな気遣い必要なのかと語尾を濁らせると。

「ええ。このお二人だけではなく、外のお車にあと何名様かいらっしゃいます。たしか豊島様はご自身分と合わせて佐原様ご注文の肥料もお引き取り予定でしたよね？ お届けされると伺っておりますので、お願いできればと思ひまして」

穏やかな口調と依頼の形式をとっているが、眼鏡の奥ですっと細

められた目が「いいから行け！」と如実に言っている。

……だから口元だけ笑みを浮かべてても逆に怖いって言ってんだろ！！！

応接室に居る二人だけではなく、まだ他に居るとなれば仕方がなく。

また、応接室を出たところで「お疲れ様です」と声をかけてきた小夜子の視線がこれまた「しっかりやらないとどうなるか解ってんでしょうね？」と語っており。

こりやもう、昼食デートは無理だなと、小さな溜め息とともに少しだけ肩を落とした。

それから、軽トラックの荷台に俺の分とさやの分の肥料を積み込み、黒塗りの先導をして農協から近い広場――専らゲートボール場として使用されている――へ移動。

道が狭くて入れないので、俺の軽トラックに乗り換えるよう伝えと、こんな車にデンカを乗せるわけにはいかないとおっさんが騒ぎ。……俺としては怒って帰ってくれることを期待したのだが、デンカとやらが鶴の一声で鎮め、結局デンカが助手席に、おっさんと子供の他に護衛という屈強な男2名が荷台に乗って、さやの家へ向かうことになったのだった。



#### 41話 幕間：幼馴染の不運 3（後書き）

——というわけで、祥二君が主人公と公子サマの対面に立ち会うことになったのは、この世で逆らえない（↑逆らうと後が怖い）慶一にーちゃんと恋人の小夜子嬢からのお申し付けのせいでした。

祥二君の名誉のために言っておきますと、彼はヘタレではありません。

慶一さんには“兄（絶対上位者）”として幼い頃から刷り込まれ、小夜子さんは“惚れた弱み”ってことで（笑）

いつも更新が遅くて申し訳ございません。

季節替わりで体調を崩したら、テンションが下がりっぱなしで……どうぞ気長にお付き合いいただけるとありがたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0972o/>

---

ローズウォーター

2011年11月14日03時19分発行